環日本海文化交流史研究集会の記録

は　じ　め　に

（財）石川県埋蔵文化財センター所長　三浦　純夫

環日本海文化交流史研究集会は、日本海に面した石川県の歴史的特質を明らかにするため、日本海沿岸域に共通するテーマを選んで沿岸各地域と調査・研究を行い、交流をはかるものである。研究集会は、財団法人石川県埋蔵文化財センターが平成12年度から「環日本海文化交流調査研究事業」の一環として実施しており、今年度が12回目の開催となった。

今年度のテーマは「中世日本海域の墓標－その出現と展開－」である。このテーマを選定した理由のひとつは、石川県珠洲市野々江本江寺遺跡における木製笠塔婆と板碑の発見にある。11世紀末から12世紀の製作と見られるこの資料は、笠塔婆・板碑の出現について大きな問題を投じており、各地域の出現時期や展開の様相を明らかにすることが必要と感じたからである。

集会では、はじめに野々江本江寺遺跡の木製笠塔婆・板碑について報告があり、ついで九州、山陰、北陸（福井県・石川県・富山県・新潟県）、東北の地域ごとに木製・石製塔婆の様相が報告された。木製に限れば、九州では佐賀県神埼市城原三本谷南遺跡で12世紀の小型卒塔婆の存在が報告され、山陰では、米子市吉谷亀尾前遺跡の大型板碑が報告された。福井・富山・新潟の各県や東北では12世紀代の木製塔婆の例はないが、長野県千曲市八幡社宮司遺跡の六角宝幢が、性格は異なるものの、12世紀の木製資料として注目された。

今回の集会で資料の集成・報告にあたられた、伊藤雅文、中島恒次郎、中森祥、赤澤徳明、安中哲徳、島田美佐子、水澤幸一、山口博之の各氏に感謝申しあげたい。

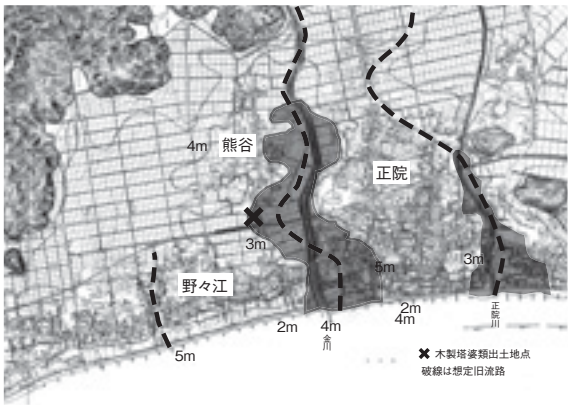
環日本海文化交流史研究集会の開催記録

年度	開催日	内　　容
H12	H13. 2.23	環日本海交流史の現状と課題
H13	H14. 2.22	鉄器の導入と社会の変化
H14	H15. 2.21	玉をめぐる交流
H15	H15.10.24	縄文後・晩期の低湿地集落－生業の視点で考える－
H16	H16.10.29	古代日本海域の港と交流
H17	H17.10.28	中世日本海域の土器・陶磁器流通－甕・壷・擂鉢を中心に－
H18	H18.10.27	縄文時代の装身具－漆製品・石製品を中心に－
H19	H19.10.26	日本海域における古代の祭祀－木製祭祀具を中心として－
H20	H20.10.24	弥生時代の家と村
H21	H21.10.23	日本海域の土器製塩－その系譜と伝播を探る－
H22	H22.10.29	近世日本海域の陶磁器流通－肥前陶磁から探る－
H23	H23.10.28	中世日本海域の墓標－その出現と展開－

珠洲市野々江本江寺遺跡出土木製塔婆類について

伊藤　雅文（財団法人石川県埋蔵文化財センター）

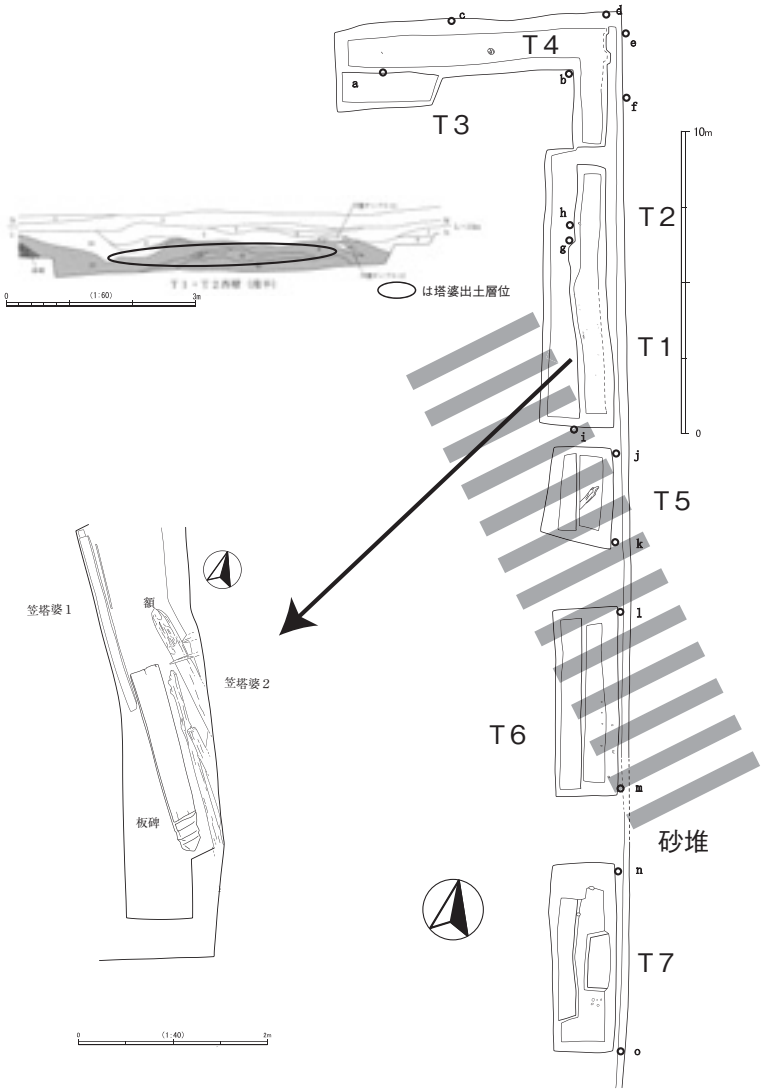
はじめに：野々江本江寺遺跡は、石川県珠洲市野々江町・熊野町に所在し、金川が作る沖積平野の標高２～４ｍに位置する。発掘調査は平成18・19年度に実施し、19年度の調査区から木製板碑１基、木製笠塔婆２基が出土した。これらの放射性炭素同位体年代で11世紀中ごろの年代が測定され、上限年代である。珠洲焼の年代も概ね12世紀中ごろ以降となっていることから、平安時代末から鎌倉時代に作られた「餓鬼草紙」などに描かれた木製塔婆の実在を明らかにする。



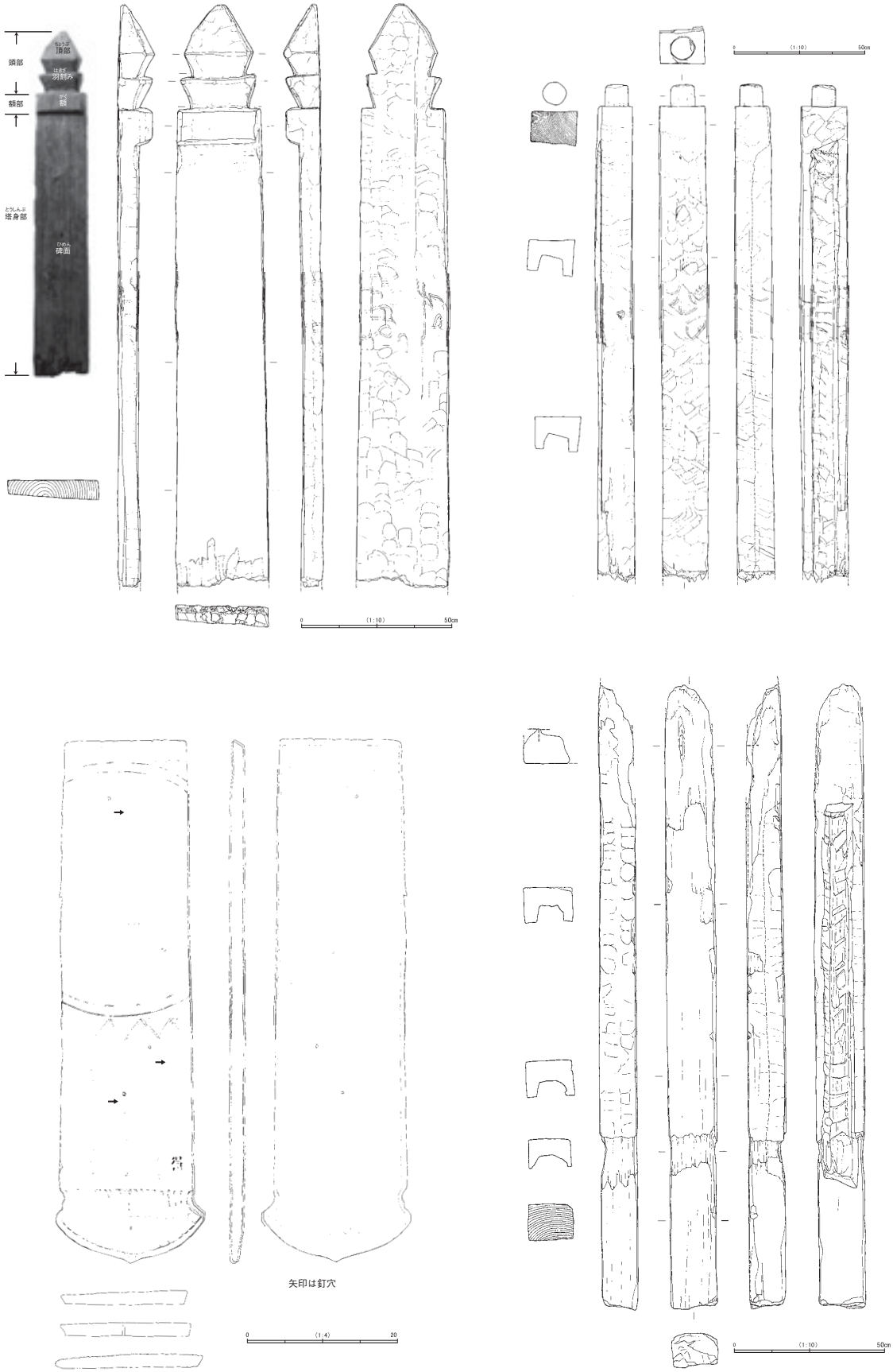
野々江本江寺遺跡周辺地形復元（S＝１／30,000）

出土：木製塔婆類の出土地点は金川の蛇行部分にあたり、低湿な地勢である。狭長なトレンチ調査により、地形の把握は困難だが、推定幅約4.5m、推定高約0.5mの砂土を中心とした高まりが、北西―南東方向に存在する（砂堆と仮称）。

木製塔婆類はこの砂堆の西に接し、笠塔婆１が額を東に向け、板碑表を上に向けて基部を接する状況で出土し、さらに笠塔婆２が東接する。これらはほぼ水平状態で出土しており、意図的な埋置である。特に、笠塔婆１の額は竿幅と同じくするように両側が鋭利な刃物で切断されており、有機物で竿と緊縛されていたと推定している。出土地点は他にも木製品が出土していることから、不用物の廃棄場所となっていたと思われる。



木製塔婆：木製板碑１基、木製笠塔婆２基でそのうちの１基に額が付属していた。発掘調査報告書の考察で時枝務氏が論じたように、塔婆の木製品ではなく木製の



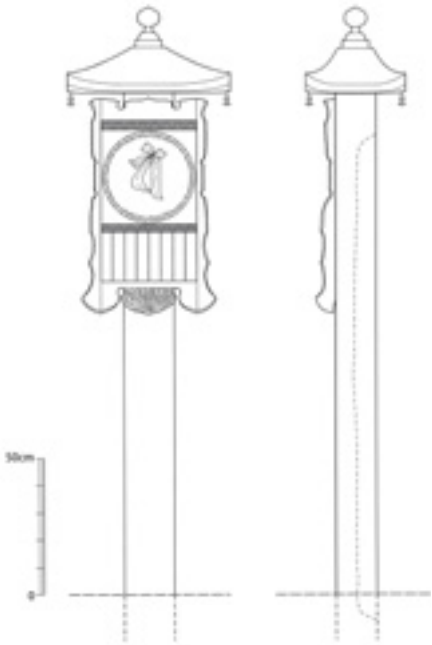
木製板碑部分名称と実測図（S＝１／10）

塔婆であり、石製塔婆のプロトタイプでもある。このため、「木製」の文字を省略する。

板碑：長193cm、幅23～30.5cmで、ヒノキ材から作られている。最外年輪の年代がAMSによる放射性炭素年代測定で1041～1066年としめされた。頭部から額部にかけて二段羽刻み状に造形され、下端は切断されている。

笠塔婆竿部：長２ｍ前後、幅15～18cm、厚11～13cmで、スギ材である。背面に幅約10cmの溝状の彫込みがあり、上端に笠に結合するためのホゾがある。１本には樹立による腐朽痕がある。年代測定では竿１が1032～1048年、竿２が1054～1047年および1123～1141年となった。

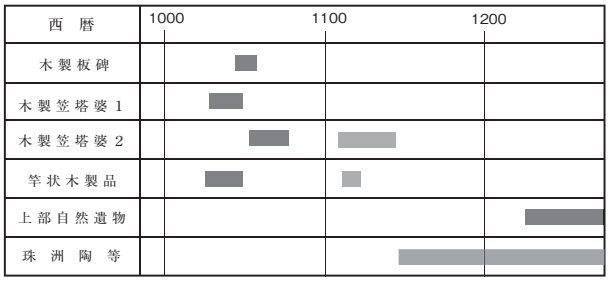
笠塔婆額部：長69.5cm、幅約17cmでアスナロ材で、両側が切断されている。円相内に「バン」が浅く掘り込まれ、黒く彩色されていたようだ。その下の区画には文字痕があり「得」のみ判読できた。竿とは鉄釘で緊結された。右図は、報告書における狭川真一氏の想定復原である。



笠塔婆想定復元図

同時に出土した竿状木製品（クリ材）の年代は1025～1047年、1114～1121年である一方、これらよりも少し上にある木材では13世紀前から中頃であるように、塔婆類との年代的な開きは100年以上となり不自然である。塔婆類のサンプル採取位置が現状で最外縁にあるが、その外に数十年分の年輪の存在が予想されるほか、笠塔婆竿が建築材の転用の可能性も想定されることより、概ね12世紀代に造立されたと考えられる。ただし、11世紀代まで遡上の可能性を否定しない。

まとめ：板碑が高価なヒノキ材から作られ都からの搬入品であろう。一方笠塔婆は地元用材で作られ、塔婆造立の思想が都から地方に移入されたものである。



出土遺物の年代整理

調査地点からこれらの造立場所を知る手掛かりはないが、屋敷墓の可能性はないが、狭川氏は報告書で付近に寺および墓地の存在を想定している。

奥能登である珠洲地域では、康治２年（1143）に若山荘が皇嘉門院に寄進され、広大な荘園が成立した。調査地点は若山荘と東に広がる国衙正院領との境界に位置する。赤阪憲雄氏による境界は「点」として存在し（「境界の発生」2002）、窪田涼子氏はパブリックと表現する（「描かれた塔婆」1995）。境界における廃棄・祭祀行為としても認識できよう。

若山荘領域

中世日本海域の墓標　その出現と展開－九州－

中島恒次郎（太宰府市教育委員会）

はじめに

石川県珠洲市野々江本江寺遺跡から出土した木製卒塔婆の社会的位置について、その帰属時期が平安時代後期（12世紀後半）である点、さらにその機能について九州から東北までの事例について議論が交わされた。

卒塔婆の機能については、多くの学説史が説くように、聖者の遺骨（仏舎利）や遺品を納めた土盛りを基調とする塔に起源を発するとされ、インド・サンチーのストゥーパ第１塔が引き合いに出される。その後中国・韓国・日本へと伝来し、「塔婆」「塔」として伝わってきたとされる。日本における「塔」字最古の記述は、『日本書紀』敏達天皇十四（585）年二月条に記される「塔」が知られており、その後の意味変容過程において、①供養具としての卒塔婆、②墓標としての卒塔婆、③境界に建つ卒塔婆の三種が、文献史料、絵画資料から読み取ることができている。いわば、供養→家族などの死者供養としての墓標→不特定多数者の供養と結界の内と外を画す標識へと意味が変容していったことが推測できる。

本研究集会では、野々江本江寺遺跡から出土した大型木製卒塔婆の機能についての議論が中心的課題であった。九州における卒塔婆の出土事例を紹介し、これらの課題に一定の方向性を示したい。

時間・空間変化

九州における卒塔婆出土事例を、表１に示した。これから読み取れるように、木製、石製の卒塔婆の出現時期は、平安後期（12世紀後半代）に求めることができ、野々江本江寺遺跡事例と時間差なく出現している。しかし機能面では、九州における古い事例は、小型の木製卒塔婆であり、供養具としての機能が濃厚な資料である点が異なっている（図１）。また卒塔婆資料の空間的な広がりとなると、出現から約１世紀のズレがあり、鎌倉後期（13世紀後半）以降に増加傾向をみせる。この増加傾向は、いずれも墓標としての卒塔婆であり、被葬者を弔う、追善供養のための標識としての意味が強まっているものと考えられる。

塔婆造立の意味

卒塔婆造立の意味を問うことは、単に卒塔婆のみを見ていては理解できないため、平安後期から鎌倉末期を対象として墓制資料を見てみよう。既に別稿にて記述してきた①屋敷墓、②共同墓地、③石塔、④輸入陶磁器埋納率について検討した結果をまとめた表が、表２である（中島、2009）。

この表から見えてくることは、鎌倉期を境として墓制上の変化が「置換」していることが読み取れる。具体的な時間軸は、13世紀後半頃を示している。いわば、本格的な中世的社会が動き始めた時と一致していることが分かる。そこで、２つの項目に分けて考えてみよう。

a. 権力継承権を正当化する装置としての塔婆

鎌倉期を様相置換の期間として、葬儀の場で葬儀参列者に対するステイタスシンボル表徴のための装置が、同時代生活者でなくても被葬者の階層を知ることができる装置として様々な道具が変容していく様をみることができる。これは、崩れてはいるものの古代的制度の「残映」と中世的な領主制に基づく地域統治制度が共存した時代から、自らの階層的位置を自己主張し、かつ継承しなければならなくなった時代への変化を表現しているものと考えられ、供養具としての卒塔婆が墓標として石造化

していく時代背景をみることができる。

b. 境界に建つ塔婆

供養具としての卒塔婆が、先祖供養のための標識としての卒塔婆へ、そして不特定多数者への境界内外を分かつ標識としての卒塔婆へと時間変化に伴い、意味変容をきたしてきた様を見ることができる。九州内において、近世に集落の内外を分かつ場に「六地蔵」が造立されており、まさにこれらが境界に建つ塔婆の事例である。考古事象上、これがどこまで遡るのか、境界に建つ不特定多数者を供養する卒塔婆を見出すことはできていないが、今後、この視点での抽出を試みてみたい。

おわりに

九州においては、平安後期に供養具として小型の卒塔婆使用が始まり、その後、権力継承権正当化の装置として「朽ちない墓標」である石製卒塔婆が造立されるようになる。今回の研究集会の主題である、境界に建つ卒塔婆事例を見いだすことはできなかったが、集落の内と外を画する場に建つ卒塔婆の出現時期ならびに広がりをおうことは、人と物と情報の往来の多さを知る上で重要な素材の一つである。意味の変容の姿とともに、考古事象上類例の探索を行い、これら卒塔婆の存在する社会的位置と意味を問うていきたい。

引用文献

神埼町教育委員会（1994）『城原三本谷南遺跡』神埼町文化財調査報告書第56集

中島恒次郎（2009）「九州の中世墓」『日本の中世墓』狭川真一編　高志書院

表１．九州における塔婆

■木製卒塔婆出土遺跡一覧【九州】

	基集成番号	遺跡名	遺構名	時代	出土遺物	備考	所在地	掲載文献
1	095	大西屋敷遺跡1区	SE007（井戸）	平安後期【12世紀後半】	卒塔婆	平安後期～鎌倉期の屋敷	佐賀県佐賀市鍋島町大字八戸溝	1
2	－	城原三本谷南遺跡	SX2001（河川）	平安後期【12世紀後半】	卒塔婆		佐賀県神埼市大字城原字三本谷	2
3	300	大宰府史跡（観世音寺）	78SD2130（池状遺構）	室町期【土器様相では室町期】	卒塔婆	嘉禄三（1227）年銘卒塔婆【12月10日から安貞元年】	福岡県太宰府市観世音寺4丁目	3
4	299	大宰府史跡（観世音寺）	45SX1200（池状遺構）	室町期	卒塔婆	元■二（元徳二　1330）年銘卒塔婆	福岡県太宰府市観世音寺4丁目	3
5	301	大宰府史跡（観世音寺）	109・111SD3200（溝）	室町期	卒塔婆	嘉元二（1304）年銘卒塔婆	福岡県太宰府市観世音寺4丁目	3
6	130	井相田C遺跡	25SE16（池状遺構）	室町期	卒塔婆	長禄三（1459）年、寛正五（1464）年銘卒塔婆	福岡県福岡市博多区井相田2丁目	4

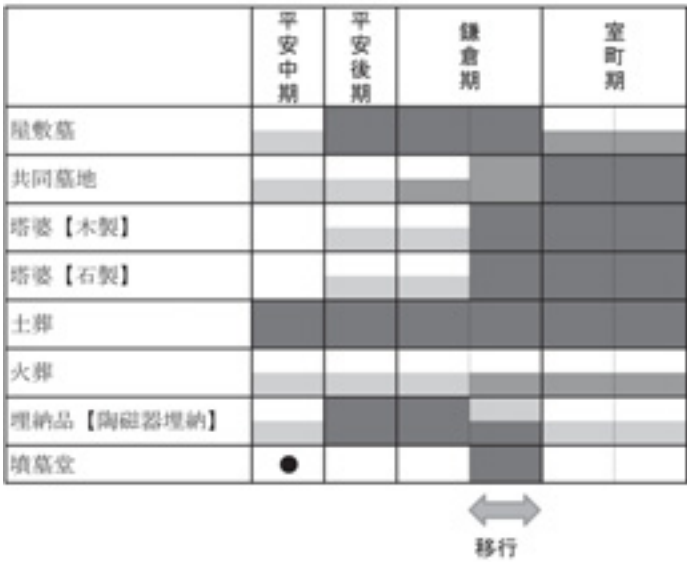
■石製塔婆一覧【九州　平安後期～鎌倉期　紀年記載資料】

	基集成番号	遺跡名	遺構名	時代	形式	備考	所在地	掲載文献
1		観音堂梵字阿弥陀三尊碑		平安後期	三尊碑	延久二（1070）年二月十七日立之	福岡県直方市植木横町	5
1		本光寺笠塔婆		平安末期	笠塔婆	安元元（1175）年十月五日	熊本県熊本市黒髪町坪井4丁目	5
2		円台寺跡笠塔婆		鎌倉期	笠塔婆	建久四（1193）・建久七（1196）年 別銘から円台寺僧侶の墓塔と考えられる。	熊本県鹿本郡植木町	5
3		蓮貴寺笠塔婆		鎌倉期	笠塔婆	仁治四（1243）・文永五（1269）年	大分県豊後高田市田染町	5
4		臨平笠塔婆		鎌倉期	笠塔婆	文永六（1269）年	大分県豊後高田市田染町臨平	5
5		蓮華寺笠塔婆		鎌倉期	笠塔婆	文永七（1270）年	熊本県球磨郡多良木町蓮華寺	5
1		中尾宮ケ迫五輪塔		平安末期	五輪塔	嘉応二（1170）・承安二（1172）年	大分県日田市中尾宮ケ迫	5
2		小村薬師堂五輪塔		鎌倉期	五輪塔	寛喜四（1232）年	宮崎県宮崎市生目小村	5
3		西安寺跡五輪塔		鎌倉期	五輪塔	正嘉元（1257）年	熊本県玉名郡玉東町	5
4		最明寺五輪塔		鎌倉期	五輪塔	正元元（1259）年	大分県宇佐郡安心院町下毛	5
5		東迎寺跡五輪塔		鎌倉期	五輪塔	建治二（1275）年	熊本県玉名郡南関町西豊永	5
6		護福寺跡五輪塔		鎌倉期	五輪塔	弘安三（1280）年	福岡県大牟田市藤田町	5
7		勝福寺五輪塔		鎌倉期	五輪塔	弘安四（1281）年	熊本県球磨郡湯前村荒茂	5
8		冷泉寺五輪塔		鎌倉期	五輪塔	弘安四（1281）年	熊本県荒尾市官内出目	5
9		観音堂五輪塔		鎌倉期	五輪塔	弘安八（1285）年	宮崎県宮崎郡清武町馬場	5
10		八里台五輪塔		鎌倉期	五輪塔	弘安八（1285）年	大分県大野郡朝倉町	5
11		西安寺跡五輪塔		鎌倉期	五輪塔	正応元（1288）・嘉元二（1304）年	熊本県玉名郡玉東町	5
1		熊野神社板碑		鎌倉期	自然石板碑	建長七（1255）年	福岡県粕屋郡古賀町篠内	5
2		横国寺板碑		鎌倉期	自然石板碑	弘長三（1263）年	福岡県田川郡赤村方田	5
3		上長田鳴石板碑		鎌倉期	自然石板碑	正応五（1292）年	熊本県玉名郡南関町	5
1		大慈寺双塔		鎌倉期	宝篋印塔	永仁元（1293）年	熊本県熊本市野田町川尻	5

■掲載文献

1 佐賀市教育委員会（1994）『大西屋敷遺跡　I』佐賀市文化財調査報告書第56集
2 神埼町教育委員会（1994）『城原三本谷北遺跡　城原三本谷南遺跡』神埼町文化財調査報告書第59集
3 九州歴史資料館（2007）『観世音寺　遺物編2』
4 福岡市教育委員会（1988）『井相田C遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第179集
5 多田隈豊秋（1975）『九州の石塔　上巻』（財）西日本文化協会

表２．九州における墓制



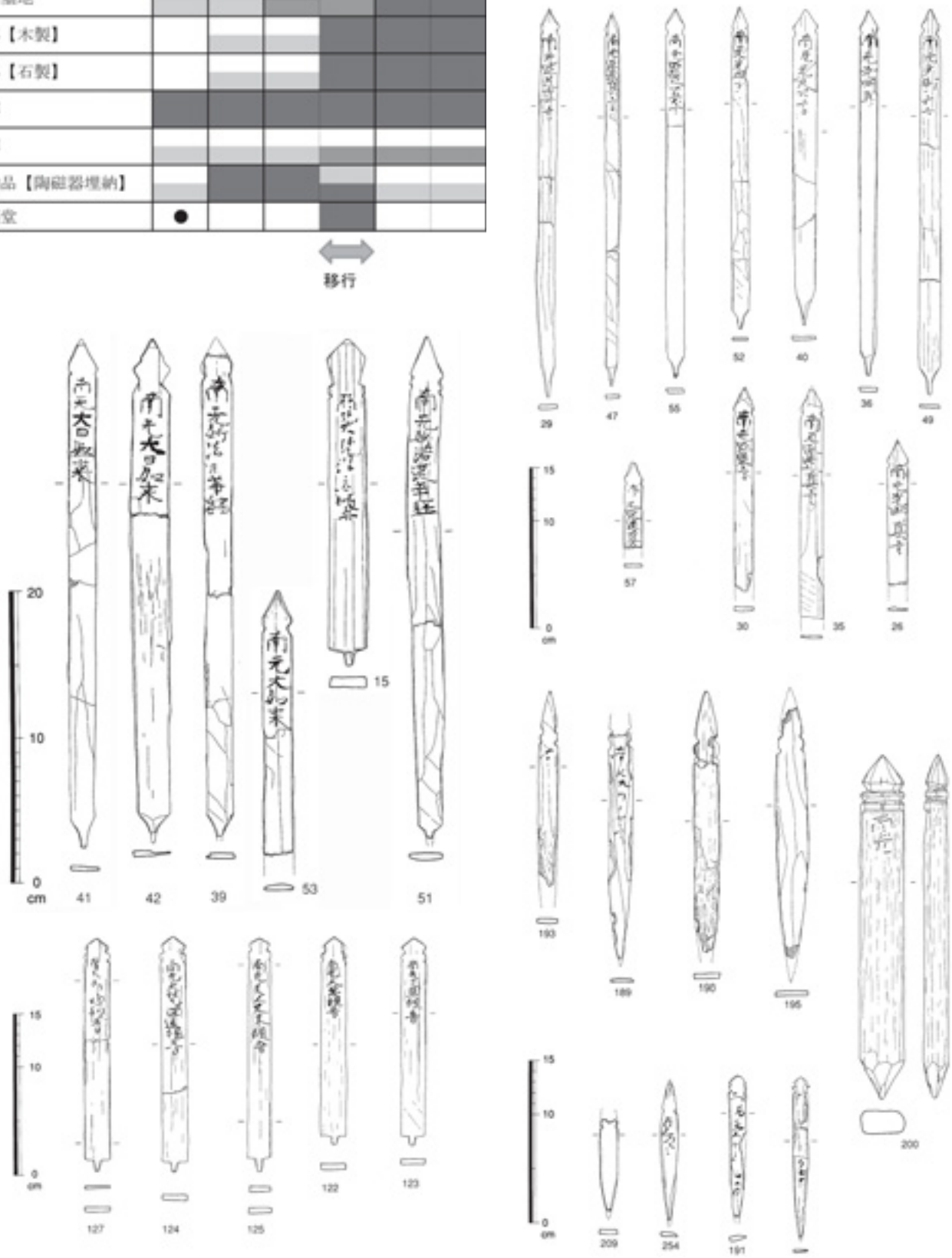


図１．木製卒塔婆【佐賀県神埼市城原三本谷南遺跡（神埼町教育委員会、1996)】

山陰における中世前期の墓標と墓

中森　祥（鳥取県教育文化財団調査室）

１．木製塔婆の事例（図１）

山陰両県（鳥取・島根）における出土事例は21件あるが、その分布は出雲（松江市～出雲市）を主体とし、鳥取の事例も島根県境に近い米子市南西部であるため、非常に偏っている。

各木製塔婆の形態を比較すると、大きくは塔婆頭部が五輪塔形のもの（１～４）と山形があり、後者については２段の切り込みをもつもの（５）、および山形の下に横方向の刻線をもつものに分けられる。五輪塔形のものでは４がもっとも小型で、共伴する遺物から平安時代後期のものとされ、もっとも古く位置づけられるが、紀年銘をもつものの最古が大宰府史跡出土例の嘉禄３（1227）年とされており、それよりも相当遡るため検討を要しよう。一方の山形では、６～８、11のように３～４ｍとなる非常に大型のものがつくられている。山持遺跡例に比べると吉谷亀尾山遺跡（11）例はやや幅が広く、また頭部の山形が低い。この頭部形態は、山持遺跡と西川津遺跡では尖り気味を呈す点で類似している。後者が近世後期の銘が書かれているのに対し、前者は同一層から出土する遺物で最新のものが平安時代とされ、年代測定から13～14世紀に比定されている。このタイプがどのような展開をしていたのか、また吉谷亀尾山例との関係について今後検討が必要であろう。

こうした卒塔婆の立てられた場所について、江戸時代後期のものながらまとまって出土した西川津遺跡をみると、40本ほどの杭状の木が立てられ、そこに塔婆も含まれていた。その位置と明治時代の切り図を照合させた結果、これら杭列が川岸に立てられた状態であったことが判明している。今回紹介した遺物についても、多くが河川や溝などに関連して出土しており、塔婆流しや流水灌頂といった葬送儀礼に伴うものであろう。

２．五輪塔の導入（図２）

13～14世紀の紀年銘をもつものは13例あるが、その大半が14世紀中頃以降のものであり、その分布は因幡・伯耆から出雲東部、そして石見西部となっており、両者の中間である石見東部から出雲西部には事例がない。この中で最古の銘をもつ倉吉市大日寺文永２年塔のように、古いタイプの五輪塔（２）が伯耆東部ではまとまってみられ、とくに一石五輪塔（４・５）はこの地域以外にあまりみられない。さらに、この地域には赤碕塔（１）と呼ばれる独特な石塔が分布し、特異な地域といえよう。

３．火葬墓の導入期（図２）

火葬導入の早い段階の事例として、鳥取県では倉吉市打塚遺跡（６）がある。一辺約12ｍの方墳で12世紀後半に位置づけられる。また、同じく県中部・長瀬高浜遺跡においても、12世紀前葉～中葉にかけての土師器皿を伴う火葬墓が複数基あることから、この段階で火葬が導入されたことは確実である。一方島根県東部では、古代末の事例があるものの本格的な導入は14世紀になってからであり、検出事例としては15世紀以降増加している。その初源的な例は安来市油坪３号墓西側墳裾に位置する石組墓（７）で、この下層に火葬墓を含む土坑が５基、ほぼ一列に並んでいた。また基壇上面から破損した陶製宝篋印塔が２基出土した。

墳墓や石積基壇には火葬骨が散骨されたような事例が多く、さらに五輪塔・宝篋印塔を立てた可能性のあるものがみられ、このような石積基壇（墳墓）・火葬骨・石造物というセットが平安時代終わりから鎌倉時代において成立したことが窺える。

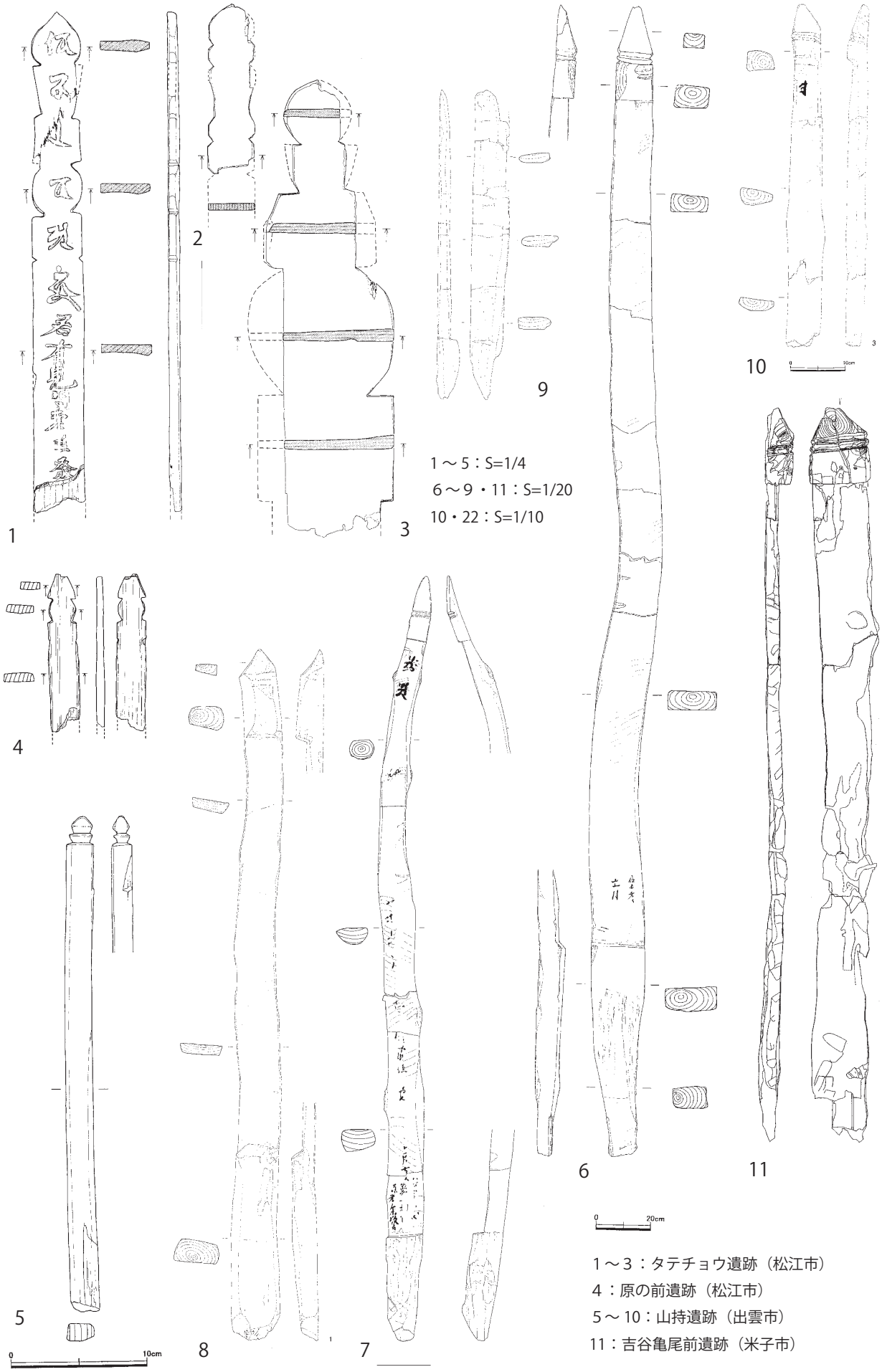
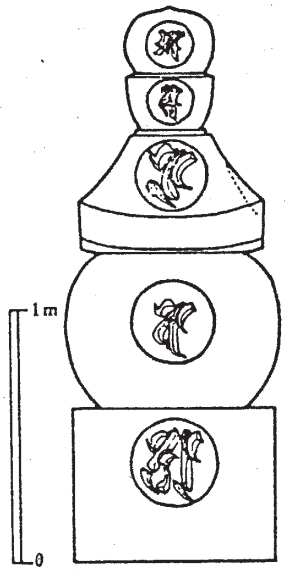
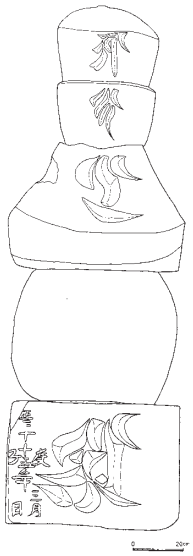

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
1～5：S=1/4
6～9・11：S=1/20
10・22：S=1/10
0 10cm
0 20cm
1～3：タテチョウ遺跡（松江市）
4：原の前遺跡（松江市）
5～10：山持遺跡（出雲市）
11：吉谷亀尾前遺跡（米子市）

図１　出土木製塔婆

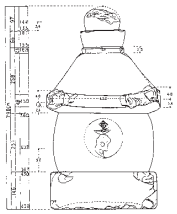
1　赤碕塔（鳥取県琴浦町）



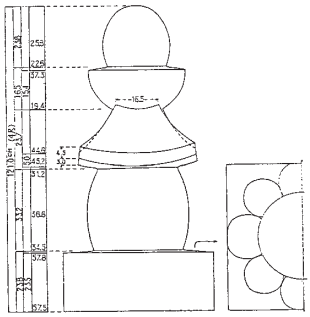
2　大日寺五輪塔
（頼朝墓・倉吉市）



3　助沢五輪塔
（鳥取県江府町）



4　大日寺円地坊
19 号塔（倉吉市）

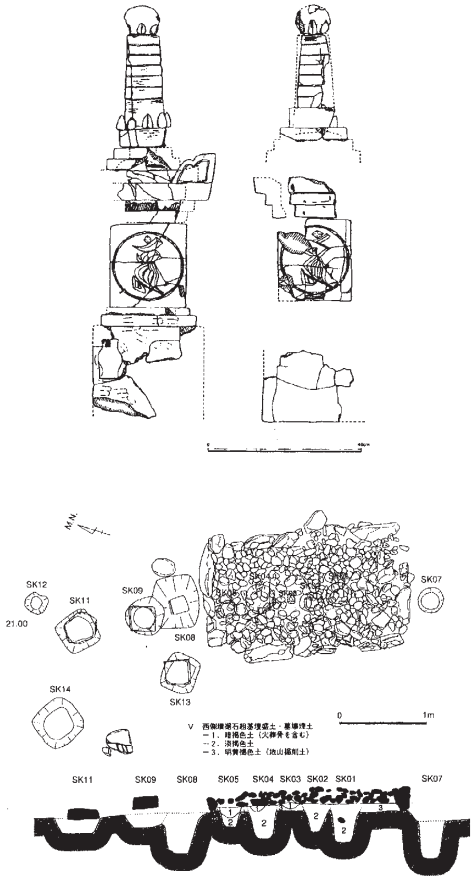


5　広瀬ヒイデ山
五輪塔（倉吉市）

1～5：S＝１／３０

6　打塚遺跡（倉吉市）

S=1/160



7　油坪３号古墓（安来市）

図２　石造物および墳墓・石積基壇

福井県の中世墓標の出現と展開について
－福井県における中世墓の展開と石造物－

赤澤　徳明（福井県教育庁埋蔵文化財調査センター）

（１）中世墓の立地について　古代・中世木製祭祀遺物の所在確認に代えて

福井県でこれまで発掘された墓地関連遺跡（寺院や中世墓群など）は丘陵や山腹で木製品が残るような低地部での調査例はないためか、明らかに墓標などの木製遺物は確認されていない。

（２）火葬の始まり

古代末から中世前期にかけてと考えられる火葬地の調査は下河端遺跡（鯖江市）、徳神遺跡（越前市）などがある。しかしこの時期の明らかに火葬墓とされるものはない。これについては集落縁辺部で単独で出土する土師器甕などにその可能性があるのではないかと考えている。その事例として下糸生脇遺跡 HS　X01、乗兼・坪江遺跡 SP218の土師器長胴甕の合口、山腰遺跡の土師器長胴甕などがある。

しかし12世紀後半から13世紀にかけて造墓された家久遺跡（越前市）では、石槨内の土葬（木棺の痕跡は未確認）されていることから、鎌倉時代前半でも火葬がどこまで普及していたか疑問である。中世墓と石塔の展開に先行して、火葬遺構の出現が先行する可能性が高い。

（３）中世墓の成立と展開　―福井県内の調査事例から―

発掘調査された中世墓として、次の５つの中世墓群がある。

漆谷中世墓群（福井市）、芳春寺中世墓群（美浜町）、山田中世墓群（おおい町）は方形区画や配石に石造物が伴うのを基本とする。刀などの副葬事例があることから、造営集団は武士階級と想定される。三峰村中世墓群（鯖江市）は方形区画や配石を行わないで石塔のみで構成される。古代から続く三峯寺に隣接することからも、造営集団は宗教関係者と考えられる。坂ノ下中世墓群（敦賀市）は石の方形区画から区画のない石塔のみの墓へ変化することが、調査内容の検討の結果から推測される。事例が限られるので、あくまで仮説であるが、石の方形区画や配石の中世墓は武士階級、石塔のみの中世墓は宗教関係者のものと考えられる。時期的に下ると、武士階級も石塔のみの墓へ変化し、石塔を造立することが下の階層にも広く広まると想定される。

（４）石塔について

①越前最古の石塔と考えられるのは、笏谷石ではなく産地不明の福井市深谷町前山出土凝灰岩質砂岩製宝塔塔身である。笏谷石製では鯖江市中野勢至堂の五輪塔が最古と思われ、加賀市山代薬王院の宝篋印塔（第２図１）もこの直後の時期であろう。また総高が１ｍにも満たないが、ほぼ同時期と考えられるものが福井県内（第２図３～５）ではもちろん、愛知県でも出土している（第２図２）。若狭では三方町（現在の若狭町）臥竜院墓地にある２基（第２図12・13）が最も古い五輪塔と考えられる。

②鎌倉から南北朝にかけては越前も若狭も、多層塔が多く残り、その後に石造物の主体となる石材でつくられている。特に福井平野周辺には笏谷石の多層塔が多く残されている。若狭では紀年銘はないものの、花崗岩製の美浜町高奈弥神社多層塔が最も古いと考えられる。

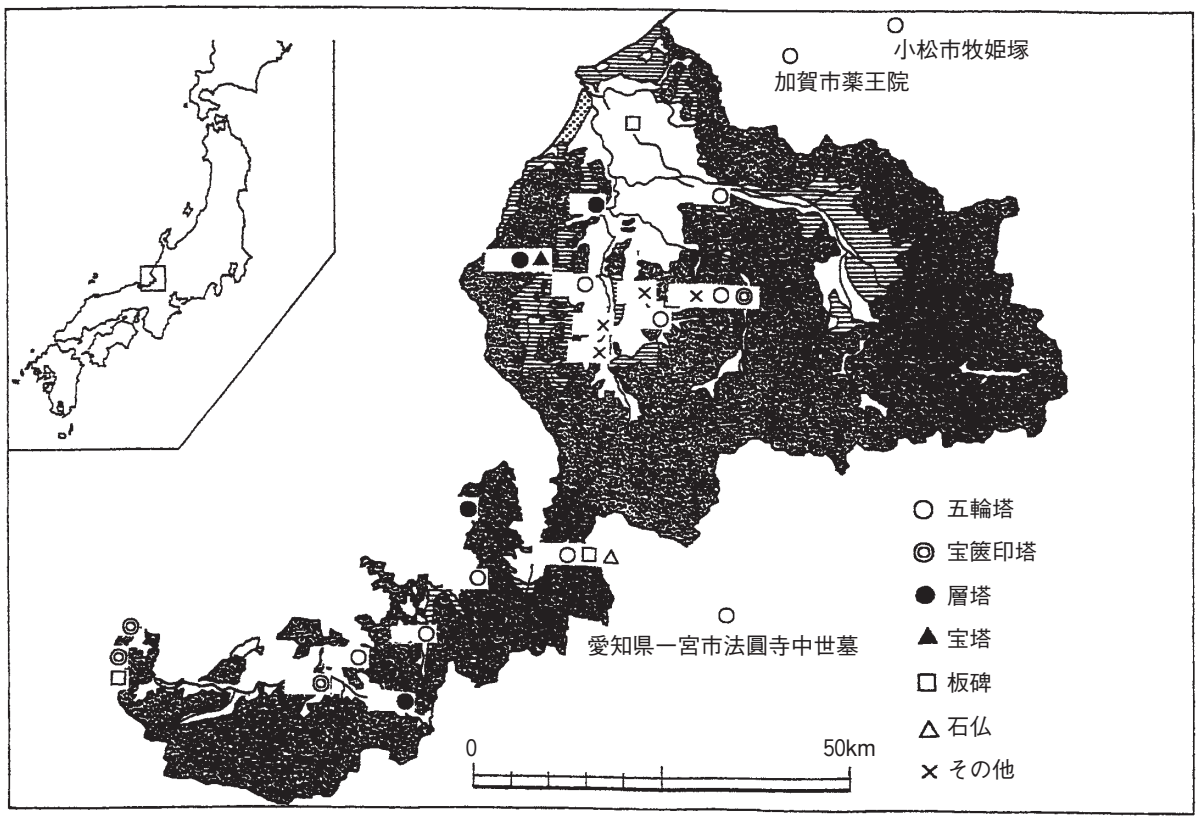
③鎌倉から南北朝にかけて、一部の限られた地域では大型の板碑が集中する地域がある。越前では坂井平野西部（坂井市春江町周辺）＝笏谷石の板碑（井ノ向の白山神社の板碑が代表）、若狭西部の高浜町＝日引石の板碑（西林寺の板碑が代表）のように狭い範囲に特定される。

④福井県内の中世石造物の種類と分布

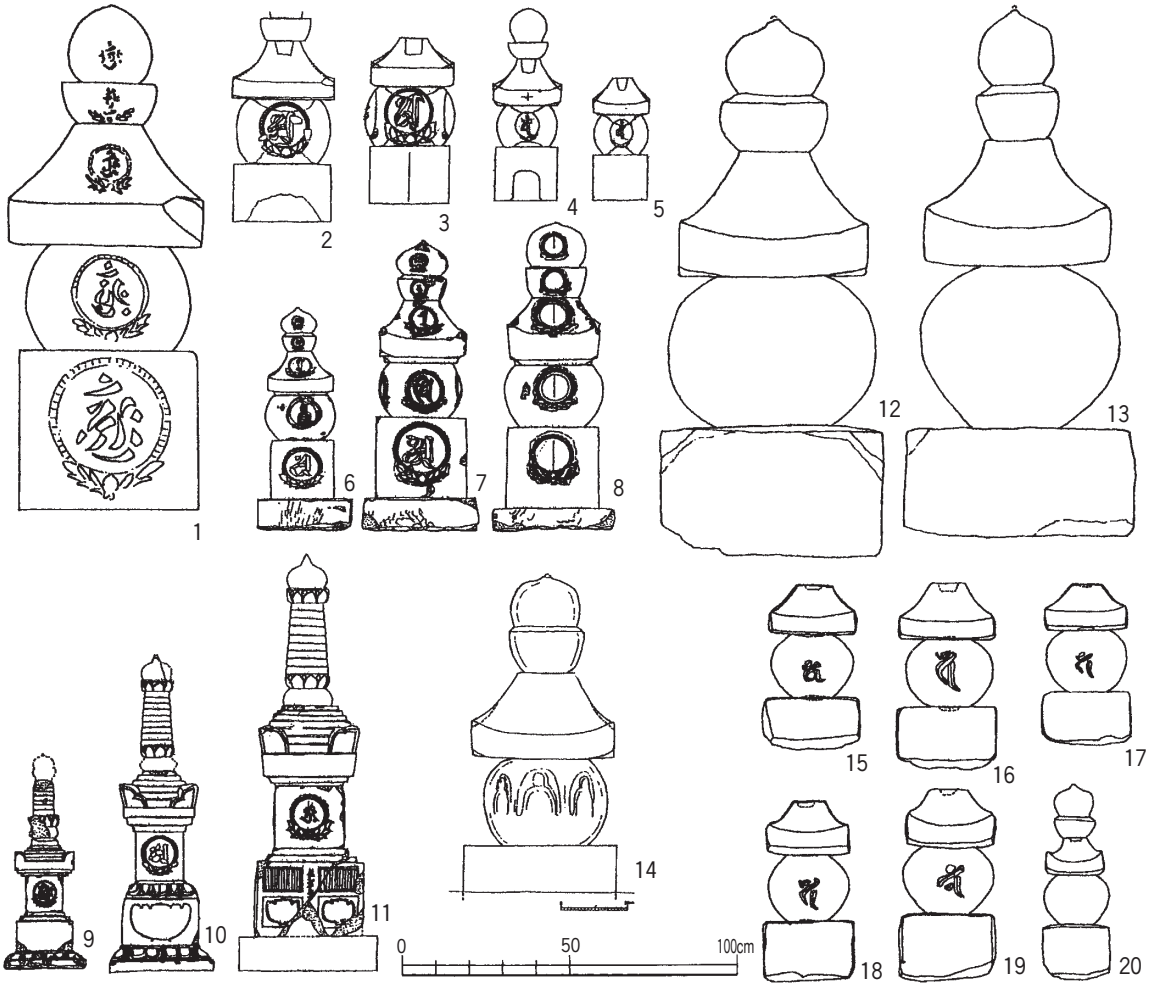
主に福井県を中心とした中世石造物一覧表

名称	所在地	番号	種別	石材	和暦	西暦	時期	時期比定根拠
家久中世墓	越前市	7 ×	礫槨墓	—	—	—	鎌倉前期	白磁・カワラケ(12世紀末)、和鏡(13世紀前)、烏帽子出土
中野勢至堂五輪塔	鯖江市	6 ○	五輪塔	笏谷石	—	—	～	
井向白山神社板碑	坂井市	1 □	板碑	笏谷石	文永 11	1274	～	
高雄神社七重塔	福井市	3 ●	層塔	笏谷石	正応 3	1290	～	
大谷寺石造九重塔	越前町	10 ●	層塔	笏谷石	元亨 3	1323	～	
薬王院五輪塔	加賀市	20 ○	五輪塔	凝灰岩	—	—	～	伝明覚小人（1106年没）の墓
法圓寺４号墓五輪塔	愛知県	22 ○	五輪塔	凝灰岩	—	—	～	13c 前半の美濃四耳壷伴う
朝日山46号墳	越前町	9 ○	五輪塔	凝灰岩	—	—	～	①
臥龍院境内五輪塔	若狭町	14 ○	五輪塔	花崗岩	—	—	～	
長英寺五輪塔	小浜市	16 ○	五輪塔	花崗岩	—	—	～	太良ノ庄内
高奈弥神社　層塔	美浜町	12 ●	層塔	花崗岩	—	—	～	相輪は後補
牧姫塚	小松市	21 ○	五輪塔	花崗岩	—	—	～	14世紀前半？
大谷寺円山宝塔	越前町	10 ▲	宝塔	笏谷石	観応 3	1352	南北朝前期	
西方寺跡(市)宝篋印塔	小浜市	17 ◎	宝篋印塔	花崗岩	延文 3	1358	～	
正楽寺宝篋印塔	高浜町	18 ◎	宝篋印塔	日引石	—	—	南北朝前期	
曹福寺九重塔	若狭町	15 ●	層塔	日引石	応安 4	1371	南北朝後期	応安の国一揆関連か？②
上瀬宝筐印塔	高浜町	18 ◎	宝篋印塔	日引石	応安 6	1373	～	
西林寺宝筐印塔	高浜町	19 ◎	宝筐印塔	日引石	応安 6	1373	～	
西林寺板碑	高浜町	19 □	板碑	日引石	応安 7	1374	～	
西林寺板碑笠塔婆	高浜町	19 □	笠塔婆	日引石	永和 3	1377	～	
伝熊谷氏五輪塔	若狭町	14 ○	五輪塔	花崗岩	—	—	～	
坂ノ下中世墓群	敦賀市	11 ○	五輪塔	花崗岩	—	—		
芳春寺山中世墓	美浜町	13 ○	五輪塔	花崗岩	—	—	15～16C 初	
三峯村墓地跡	鯖江市	4 ×	甕棺	—	—	—	13C	
三峯村墓地跡	鯖江市	4 ○	五輪塔	笏谷石	—	—	14～16C 末	
三峯村墓地跡	鯖江市	4 ◎	宝篋印塔	笏谷石	—	—	14～16C 末	
下河端遺跡	鯖江市	5 ×	火葬遺構	—	—	—		
徳神遺跡	越前市	8 ×	火葬遺構	—	—	—		

＊①同じようなタイプの笏谷石製五輪塔が13世紀に成立すると考えられる諏訪間興行寺から出土している。
＊②応安の国一揆とは貞治５年（1366）に若狭の守護となった一色（範光）氏の国人に対する抑圧＝半済（新規の税の導入）に対する国人との争い・応安４年（1371）に守護側の勝利で終り、一色氏の若狭支配が安定する。



第１図　福井県を中心とした石塔位置図（S＝１／1000,000）



1．加賀市薬王院　2．愛知県一宮市一宮市法圓寺中世墓遺跡　3～5．越前町朝日山古墳群　6～11．鯖江市三峰村跡墓地
12・13．若狭町臥竜院墓地　14．小松市牧姫塚　15～20．敦賀市坂ノ下中世墓群

第２図　福井県を中心とした凝灰岩（笏谷石）製と花崗岩製・日引石製の主要な石塔（S＝１／20）

福井県内の板碑を含む石塔の分布は次のような状況である。

・敦賀を除く越前の平野部には笏谷石の五輪塔に少ないが宝篋印塔が展開し、戦国期になると一乗谷周辺の地域に板碑と一石五輪塔が多数存在する。三峰村墓地跡では越前でも類例が少ない宝篋印塔（第２図９～11）が出土し、現存塔が少ない五輪塔もいくつか復元されている（第２図６～８）が、このように遺存状態が良好な石塔群は越前では珍しい。

・奥越盆地（大野市と勝山市）では白山平泉寺を除いて中世の石塔はほとんど見ることができない。

・敦賀から若狭東部には花崗岩の五輪塔（第２図15～19）・宝篋印塔・多層塔・石仏と花崗閃緑岩の板碑（坂ノ下中世墓群・芳春寺中世墓群）が中世全般にわたり分布する。16世紀以降に笏谷石の板碑が散見されるのは、朝倉氏に関連する集団のものと考えられる（坂ノ下中世墓群）。

・若狭では南北朝期あたりまで花崗岩の五輪塔・宝篋印塔が分布するが、南北朝のころを境に小浜から西側を中心に日引石の宝篋印塔が広範囲に分布するようになる。中世後半（15世紀ぐらいか？）からの石塔は、若狭西部ではほとんどが日引石で占められ、若狭東部の美浜町や敦賀まで広がるようになる（第２図20）。

・日引石製石塔が西日本各地の広範囲に広がるのは倭寇の活動時期とダブるものとされ（大石一久氏の研究による）、若狭でも東では前代より引き続き花崗岩の石塔の分布が多く、越前では日引石製・花崗岩製の石塔は非常にまれである。

加賀・能登における古代末～中世前半期の墓地と墓標

安中　哲徳（財団法人石川県埋蔵文化財センター）

墓標と記年銘資料　古代～中世にかけての墓の形状は、『餓鬼草紙』に見える高塚で周りに石を積んだ墳丘墓がイメージできるが、実際には墳丘の有無、周溝（区画溝）の有無、配石（集石）・区画石の有無などの各要素と、上に墓標（石塔）、下に蔵骨器や土器棺を持つかどうか、火葬か土葬かなどが組み合うとさらに複雑な状況を呈しており、完全には整理できていない状況にある。

古代の墓制については、古代前半に見られた火葬骨を蔵骨器に埋納した土坑墓が輪島市道下元町遺跡や小松市河田山古墳群などで見られるが、火葬はまだ一般化しておらず普及はしていない。

県内の石塔類には、五輪塔や宝篋印塔、板碑、層塔などがあり、本来は供養塔の意味で建てられていたものが、14世紀後半以降、墓標として変化してきたとされている。記年銘を持つ石塔類の中で最古の事例は、羽咋市福水朝日山遺跡の弘安二年（1279）銘を持つ自然石板碑で、13世紀代を中心とする７基の礫を伴う墳丘墓から珠洲焼壺や片口鉢、土師器皿が出土している。福水寺住職の墓とされており、板碑は門弟等が造立したものと考えられている。また、珠洲市法住寺墓地では、元久元年（1204）銘を持つ経筒外容器が出土しており、経塚が造られた後、珠洲焼甕棺墓の土葬墓と珠洲焼の蔵骨器を持つ火葬墓とが混在する集団墓地へ変遷することがわかる。能登町明泉寺鎌倉屋敷の集団墓地内では、永享三年（1431）八月廿七日銘五輪塔地輪が確認されており、塔下から珠洲焼四耳壺の蔵骨器が出土している。周囲に積み直された石塔も多く、五輪塔と蔵骨器の同時性には検討も要すが、珠洲焼編年の基準資料となっている。県内最古の五輪塔には加賀市薬王院塔や能登町最安寺塔が位置づけられ、14世紀前半の造立とされている。

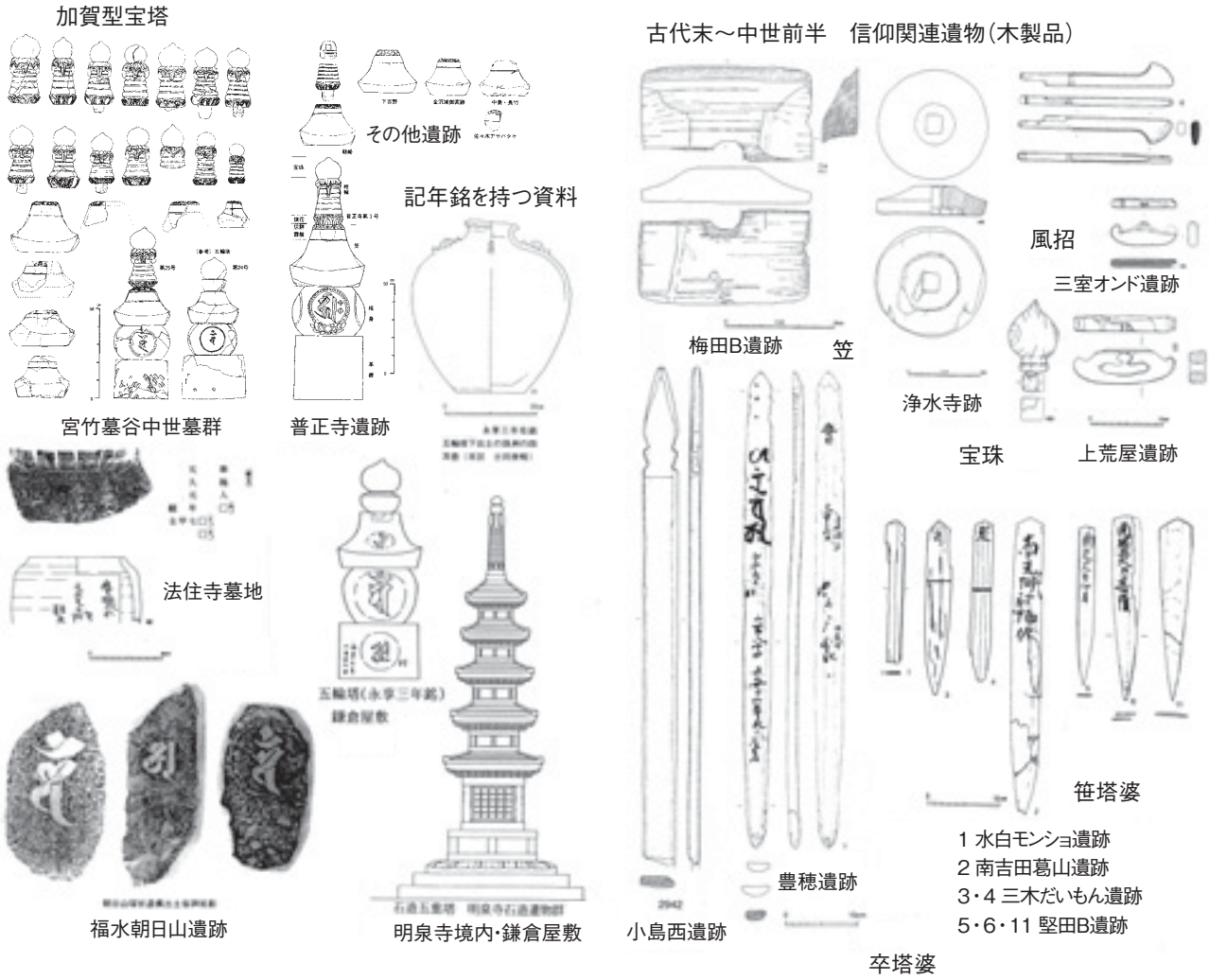
加賀型宝塔　古くから五輪塔の火輪とされてきたものの一群に、頂部に反花装飾を持つ一群があることが知られていたが、能美市宮竹墓谷中世墓群の調査で相輪と一体的に出土したことにより、宝塔の笠であることが明らかとなった。その後、金沢市史編纂による金沢市普正寺遺跡の実測調査により、第３号塔が完形の宝塔に復元されている。形状は、基礎・塔身は五輪塔の地輪・水輪と同一形態であり、単独では判別困難である。笠は頂部に反花装飾を持ち、下方に沈線を巡らせる。反花を伏鉢、沈線を露盤に対比できる相輪は、上から宝珠・水煙・反花・五輪・請花を持ち、笠と組合わすことで五輪塔・宝篋印塔と区別することが可能である。石材は、緑灰色を呈する凝灰岩が多く、産出地に小松市南部の滝ヶ原町周辺が、凝灰質砂岩のものは小松市北部丘陵と想定されているものもある。分布は、北は津幡町から南は加賀市までの加賀地方を中心に確認されているが、宝達志水町や富山市での確認例もある。時期は、14世紀後半～15世紀前半を中心に造立されており、時期が降るにつれ反花と沈線の省略化が見られる。また、意図的な破細行為による廃棄や他に転用される例が、能美市宮竹墓谷中世墓や金沢市額谷遺跡、小松市八里向山Ｈ遺跡などで見られる。三浦純夫氏による越前式装飾を持つ宝塔の検討により、これら特徴を持つ宝塔は、円山塔に代表される越前嶺北の宝塔に源流を置き、14世紀第４四半期に出現することが明らかとなっており、今回改めて加賀型宝塔として提示したい。

信仰関連遺物　古代～中世の墓標・信仰関連遺物と考えられる木製品の中で、珠洲市野々江本江寺遺跡出土の大型木製板碑や笠塔婆など全形を復元できる類例は他に見ることができない。

笠塔婆の笠形木製品が金沢市梅田Ｂ遺跡や小松市浄水寺跡などから出土し、小松市浄水寺跡からは笠塔婆の宝珠の可能性がある木製品が出土している。

七尾市三室オンド遺跡からは、長野県千曲市社宮司遺跡出土木造六角宝幢に類似する11世紀前半の風招型木製品が出土している。他に、金沢市上荒屋遺跡出土例も風招の可能性がある。

七尾市小島西遺跡では11世紀末～12世紀の卒塔婆が、金沢市豊穂遺跡でも頭部が五輪塔形で、永和元年（1375）銘墨書を持つ卒塔婆が出土しており、柿経写経供養に関連することが明らかとなった。
笹塔婆は、中能登町水白モンショ遺跡や宝達志水町南吉田葛山遺跡、金沢市堅田Ｂ遺跡などから出土している。木製遺物の場合、川跡や溝、鞍部などからの出事事例が多く、墓標として実際に墓で使用されていたか不明であり、意図的な廃棄行為や信仰・祭祀行為などに伴う可能性も考えられる。



墓地と石塔の変遷　加賀　平野部では屋敷墓が12世紀の白山市中村ゴウデン遺跡や13世紀の加賀市三木だいもん遺跡の土葬木棺墓（単独墓）に確認できる。北頭位で北側に副葬品がある点が共通し、領主層クラスの屋敷墓と位置付けられている。白山市白山町遺跡・白山町墳墓遺跡では、13世紀前半の土葬土坑墓・配石墓から、14世紀後半～16世紀前半に造営された方形区画の火葬配石墓へと変遷する。土葬土坑墓上からは五輪塔地輪が現位置を保ち出土している。小松市牧口中世墓地は畿内周辺から搬入された五輪塔を持つ単独の墳丘墓で、下部の切石組石室内に加賀焼甕棺を持つ土葬墓である。

火葬墓は13世紀前半から認められ、能美市湯屋チョウヅカ遺跡や小松市八里向山Ｆ遺跡・Ｈ遺跡など焼土坑墓や土坑上に盛土した墳丘墓が出現し、蔵骨器に火葬骨を埋納する例も見られるようになる。14世紀に入ると小松市軽海中世墓群や八里向山Ｈ遺跡円形や方形の配石墓群が認められ、五輪塔等の石塔が造立されるようになるなど、火葬文化の広がりが見られる。14世紀後半以降、配石墓群は急増し、金沢市普正寺遺跡の五輪塔や宝篋印塔・加賀型宝塔・板碑など石塔類も増加し、追善供養

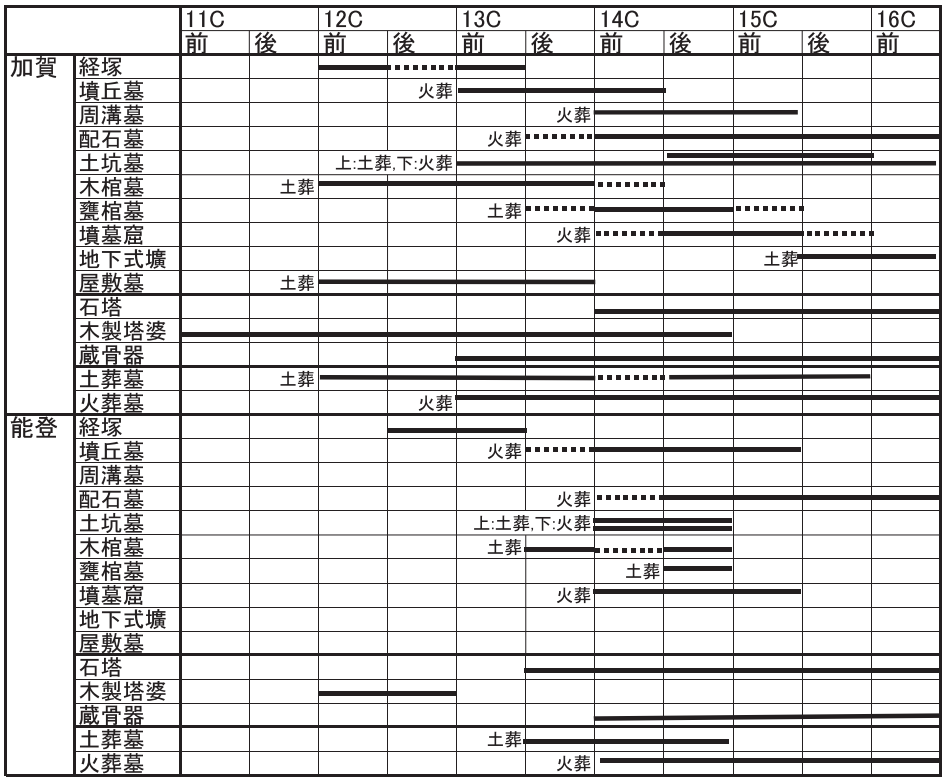
に伴う造立の増加が確認できる。また、白山市劔崎遺跡や金沢市額谷遺跡の方形周溝墓・区画溝墓の出現など埋葬形態も多様化する。他に、経塚の周辺に一定期間置いてから火葬墓が造営される例が、能美市宮竹墓谷中世墓群や金沢市小坂１号墳々頂経塚・中世墓地で認められる。

地下式壙、地下式横穴墓は津幡町刈安野々宮遺跡や加賀市敷地天神山遺跡群など15世紀後半以降に見られるが、中世前半には出現していない。僧侶の修行窟や入定窟と考えられている。

能登　経塚の周辺に一定期間置いてから墓地を造営する例が珠洲市法住寺墓地で見られ、元久元年（1204）銘を持つ経筒外容器が出土している。14世紀前半～15世紀前半には土葬の甕棺墓の土坑墓から蔵骨器を持つ火葬墓への変遷が想定されており、五輪塔や宝篋印塔などの石塔が集積されている。羽咋市福水朝日山遺跡では、土葬木棺墓上に墳丘墓を造り、隅に県内最古の弘安二年（1279）銘を持つ自然石板碑が置かれている。13世紀～14世紀前半にかけての墳丘墓が隣接して造営されており、焼土坑や蔵骨器、火葬骨が出土していることから、土葬から火葬への変遷が見られる。七尾市細口源田山遺跡では、14世紀後半以降の木棺墓・甕棺墓の土葬墓から15世紀前半以降、配石墓や火葬骨埋納ピットなどの蔵骨器を持つ火葬墓へと変遷し、五輪塔も造立されるようになる。

加賀同様、火葬墓は13世紀代の墳丘墓で出現し、14世紀後半以降、石塔、蔵骨器を持つ配石墓が増加するが、能登では方形周溝墓は確認されていない。能登町明泉寺境内・鎌倉屋敷では、五輪塔や宝篋印塔が源頼朝の墓と伝承される大型の宝篋印塔を中心に集められている。14世紀～15世紀の火葬墓の集団墓地とされ、永享三年（1431）銘を持つ五輪塔地輪の下から珠洲焼四耳壺の蔵骨器が出土している。七尾市三引遺跡は、14世紀～15世紀代に配石墓と土抗墓が造営され、蔵骨器が出土している。石造物は後出的な墓に伴うとの指摘があるが、塚には杉が神木として祀られており、当時から墳墓の標識となっていた可能性がある。七尾市中笠師中世墓群では、14世紀後半～16世紀前半の配石墓を検出している。内部に蔵骨器、火葬骨ブロックを持ち、上部に五輪塔と板碑を確認している。

加賀・能登の中世墓　属性別変遷表



能登町五十里洞穴中世墓や志賀町地頭町中世墳墓窟などの墳墓窟が14世紀代に見られる。上部に五輪塔や宝篋印塔、板碑が置かれ、下部から蔵骨器や火葬骨が出土している。石塔の組合せがわかる好例である。奥壁の鉄釘や棒を渡していた可能性がある側壁に掘られた穴には、懸仏や位牌がかけられていた可能性が指摘されており、興味深い。

富山県の様相

島田美佐子（財団法人富山県文化振興財団）

木製塔婆の出土事例

中世前半には大型木製塔婆の出土事例はなく、小型の「卒塔婆」・「塔婆」として報告されているものが数例ある。南砺市梅原胡摩堂遺跡(①)出土例は、両面に金剛界･胎蔵界を表す梵字が墨書され、同市蛇喰（じゃばみ）Ａ遺跡(②)では、両面に同書式で光明真言の梵字が墨書されたものが2点出土している。

大型卒塔婆の出土事例は、中世後半ではあるが、黒部市堀切遺跡Ｆ区（③）SD２から出土している。卒塔婆は８点あり、最大のものの残存長は127㎝である。頭部形状は圭頭状と五輪塔状があり、表面に梵字と墨書が認められる。この他には笹塔婆や梵字の残る用途不明木製品、柿経（約２万点）が出土している。共伴した柿経は、現在整理中であるが、主に理趣経と法華経が記されている。

石塔の出現と展開

石塔には、五輪塔・宝篋印塔・層塔・板石塔婆（板碑）・一石五輪塔がある。

五輪塔は、中世石造物の中で数量が一番多く、在銘資料には14世紀代の資料がある。鎌倉期に出現後、南北朝時代に盛行、16世紀代には衰退したと考えられる。宝篋印塔は、数量が比較的少なく、関西形式が主体形態で、造立が本格化するのは南北朝期と推定される。層塔は、完形資料は無く、形態から14・15世紀代のものが多い。板石塔婆には、県内の石造物の在銘資料の中で最も古いものがある。オベリスク状の形態が多く、これは16世紀には小型品となる。種子と五輪図形を刻んだものが半々で、種子は、「バン」、「キリーク」が多い。一石五輪塔は、15～16世紀に盛行したと推定する。

本来石塔は、起塔の功徳を信じて造る供養塔であったはずが、16世紀くらいから本来の意味に変化が生じ、17世紀前半には石の墓標に影響を与え、石塔風の墓標が造られるようになる。供養塔から墓標への転換を示す事例としては、氷見市脇方谷内出（わきがたやちで）中世墓（④）、上市町黒川上山（くろかわうえやま）墓跡（⑤）がある。

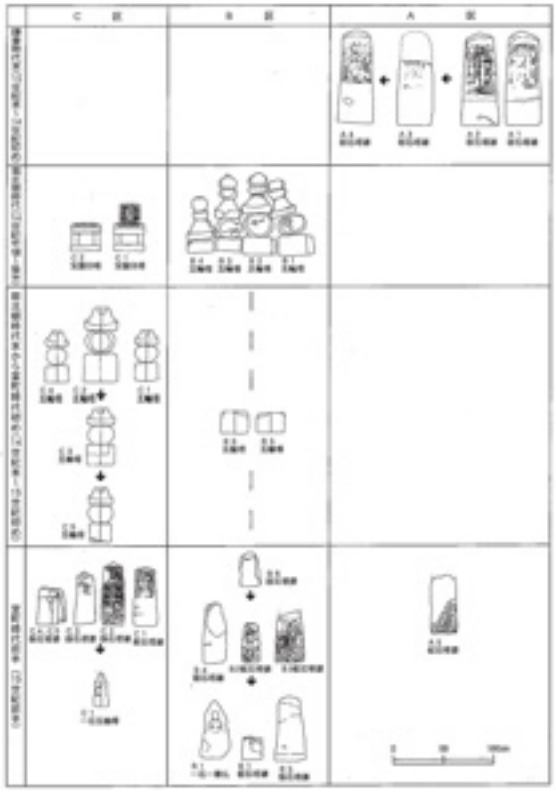
中世前半の墳墓

富山県における中世前半の墓の様相は、平野部の集落遺跡内で検出されるものと、丘陵部の寺院など宗教関連施設に伴うもの、単独出土で性格が不明なものがある。集落内での検出例は、南砺市梅原胡摩堂遺跡、高岡市中保Ｂ遺跡（⑥）、富山市友杉遺跡（⑦）などがある。これらは長方形を呈する土壙墓で、中保Ｂ遺跡２基・友杉遺跡１基は共に木棺が遺存している。この他にも、中世前半の集落では副葬品と想定する遺物の出土状況から、土壙墓と推定される遺構が散発的に検出される例がある。寺院など宗教関連施設に伴う例は、南砺市若宮遺跡、香城寺惣堂遺跡（⑧）、黒川上山墓跡などがあり、方形石組墓や墳丘墓などマウンドを伴うものが多い。黒川上山墓跡では、12世紀後半から15世紀初頭までの造墓活動の変遷を追うことができ、８割以上が火葬と推定されている。特殊例としては、長方形の石組の主体部をもつ下新川郡朝日町の柳田古墓（⑨）がある。その後、集落遺跡の一端に集団墓地と見られる土壙墓群が造られるようになるのは、14世紀～15世紀頃である。

火葬の普及

寺院など宗教関連施設では、多くの墳墓において火葬骨が蔵骨器に埋納されており、火葬の導入は早く、12世紀後半から認められる。中世前半の集落における調査例では、未だ土葬と推定する埋葬例が多く、その検出数から墓に埋葬されること自体が特別な身分であったことが窺える。中世後半になると、集団墓地化した土壙墓が増加することから、埋葬の習慣が一般へ普及したと考える。火葬の一般集落への普及は、現在の事例からは、火葬場と推定される遺構が検出されている富山市金屋南遺跡（⑩）や小矢部市臼谷岡ノ城北遺跡（⑫）などが示すように15世紀となると推定する。

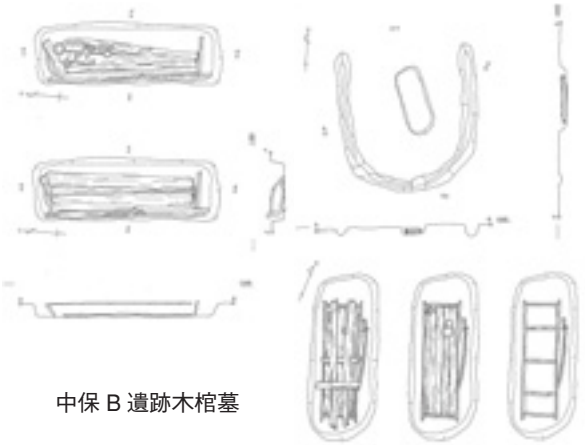
堀切遺跡Ｆ区 SD２出土関連木製品



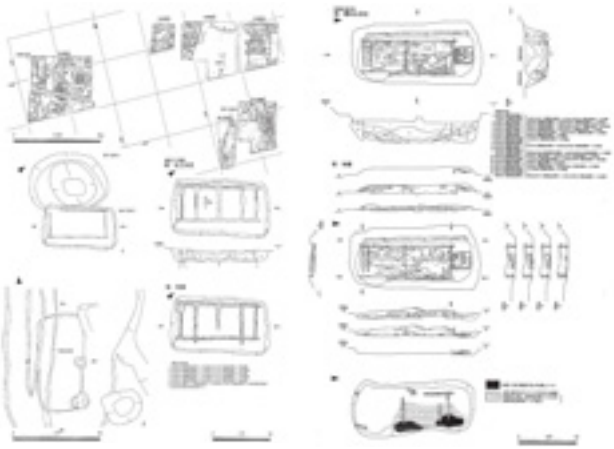
脇方谷内出中世墓変遷推定図

種　類	年　次　在　銘　資　料	形態から時期が判る資料
五輪塔	黒部市荻生の地輪　嘉歴４（1329）年 富山市大法寺の地輪　貞和２（1346）年 富山市法蔵寺の地輪　応安３（1370）年	福岡町西明寺塚２基盛土上13世紀代。 上市町黒川上山２号墓　13世紀前半 南砺市池尻遺跡　14世紀代 氷見市藪田薬師中世墓　15世紀前半から後半
宝篋印塔		高岡市蓮花寺　鎌倉期 氷見市宇波神社　14世紀 氷見市藪田薬師中世墓　15世紀
層塔	富山市友坂熊野神社例　康永２（1343）年	
板石塔婆	射水市本江神明社　文永４（1267）年 氷見市髪塚盛土上　貞和３（1347）年 南砺市鍛冶神明社　大永６（1526）年 富山市本江経塚　享禄４（1531）年 氷見市藤井家墓地例、氷見市長坂光西寺墓地例　天文３（1534）年 富山市上栄例　天文24（1555）年 氷見市石動山平沢道例　天正５（1577）年	射水市（旧大島町）大日寺　鎌倉期 高岡市永願寺　鎌倉時代 氷見市脇方谷内出中世墓　オベリスク状の大型品、鎌倉末期
一石五輪塔	立山町芦峅寺　天正14（1586）年	

富山県の石塔

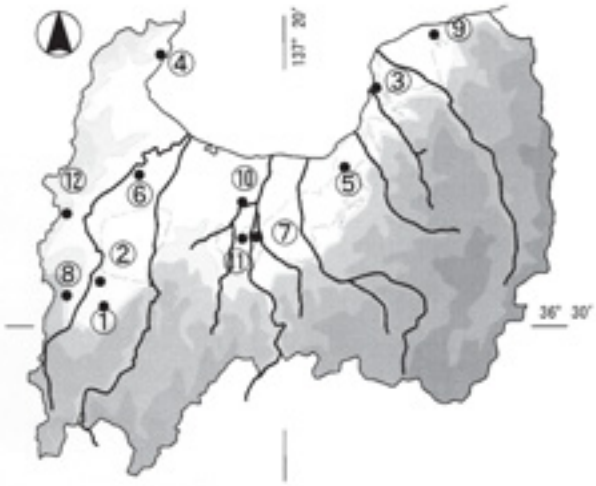


中保Ｂ遺跡木棺墓



友杉遺跡木棺墓

黒川上山墓跡（中世墓群）遺構全体図



主要遺跡位置図

引用・参考文献

遺跡番号	出　版　年	書　　名	発　行　機　関
	1994	中世北陸寺院と墓地	北陸中世土器研究会
	1996	飾る・遊ぶ・祈る	北陸中世土器研究会
	2000	中世北陸の石塔・石仏	北陸中世土器研究会
	2006	中世墓資料集成－北陸編－	中世墓資料集成研究会
	1976	富山の石造美術	京田良志　巧玄社
③	2006	堀切遺跡Ｆ区発掘調査報告書	黒部市教育委員会
④	2000	脇方谷内出中世墓	氷見市教育委員会
⑥	2002	中保Ｂ遺跡調査報告	高岡市教育委員会
⑫	1991	臼谷岡ノ城北遺跡発掘調査概要	小矢部市教育員会
		梅原加賀坊・久戸遺跡・梅原安丸遺跡・田尻遺跡発掘調査報告	(財)富山県文化振興財団
	2006	下老子笹川遺跡発掘調査報告	(財)富山県文化振興財団
②	1990	梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告（遺構編）	(財)富山県文化振興財団
⑧	1993	医王山文化調査報告「医王は語る」若宮遺跡　香城寺惣堂遺跡	医王山文化調査委員会
①	1998	蛇喰Ａ遺跡	井口村教育委員会
⑩	2007	富山市金屋南遺跡発掘調査報告書Ⅳ	富山市教育委員会
⑦	2010	友杉遺跡発掘調査報告	(財)富山県文化振興財団
	1992	吉倉Ａ遺跡	富山県教育委員会
	1992・1993	吉倉Ｂ遺跡	富山県教育委員会
	1996	富山県婦中町堀Ⅰ遺跡	婦中町教育委員会
⑪	2003	中名Ⅰ・Ⅴ遺跡発掘調査報告	(財)富山県文化振興財団
	2002	清水島Ⅱ遺跡・中名Ⅱ遺跡・持田Ⅰ遺跡	(財)富山県文化振興財団
⑤	2005	富山県上市町黒川遺跡群発掘調査報告書	上市町教育委員会
⑨	1974	富山県柳田遺跡・柳田古墓緊急発掘調査概報	富山県教育委員会

越後の墓標－14世紀以前を中心にして－

水澤　幸一（胎内市教育委員会）

１．木製塔婆について

越後における木製塔婆は、1300年前後の紀年銘木簡と伴出した50㎝以下の笹塔婆が数遺跡から出土しているにすぎない。主な出土遺跡をあげると、新潟市馬場屋敷遺跡下層（白根市教委1983）、同浦廻遺跡（新潟県教委2003）、胎内市下町・坊城遺跡Ｃ地点（中条町教委2001）出土のものがある。

これらで注目されるのは、下町・坊城遺跡例と浦廻遺跡の数例に頭部を墨で黒く塗り、圭頭で２段の羽刻みを入れるタイプが認められることである。これらは、平安末期の『餓鬼草子』に描かれた木製板碑の系譜を引くものであるが、その間をつなぐものは非常に少ない。

２．石製塔婆について

北陸における最古の紀年銘石造物は13世紀後半である（水澤2001）が、定量的出現は、13世紀第４四半期からと考えられる（ただし越後頸城の関山系石仏を除く）。これは、上の笹塔婆の出現と時期を同じくしており、両者が不可分の関係にあることを意味しよう。越後では、頸城郡で五輪塔が、阿賀北～阿賀南と魚沼で板碑が主に造立される。佐渡では、中世の石造物は非常に少ない。

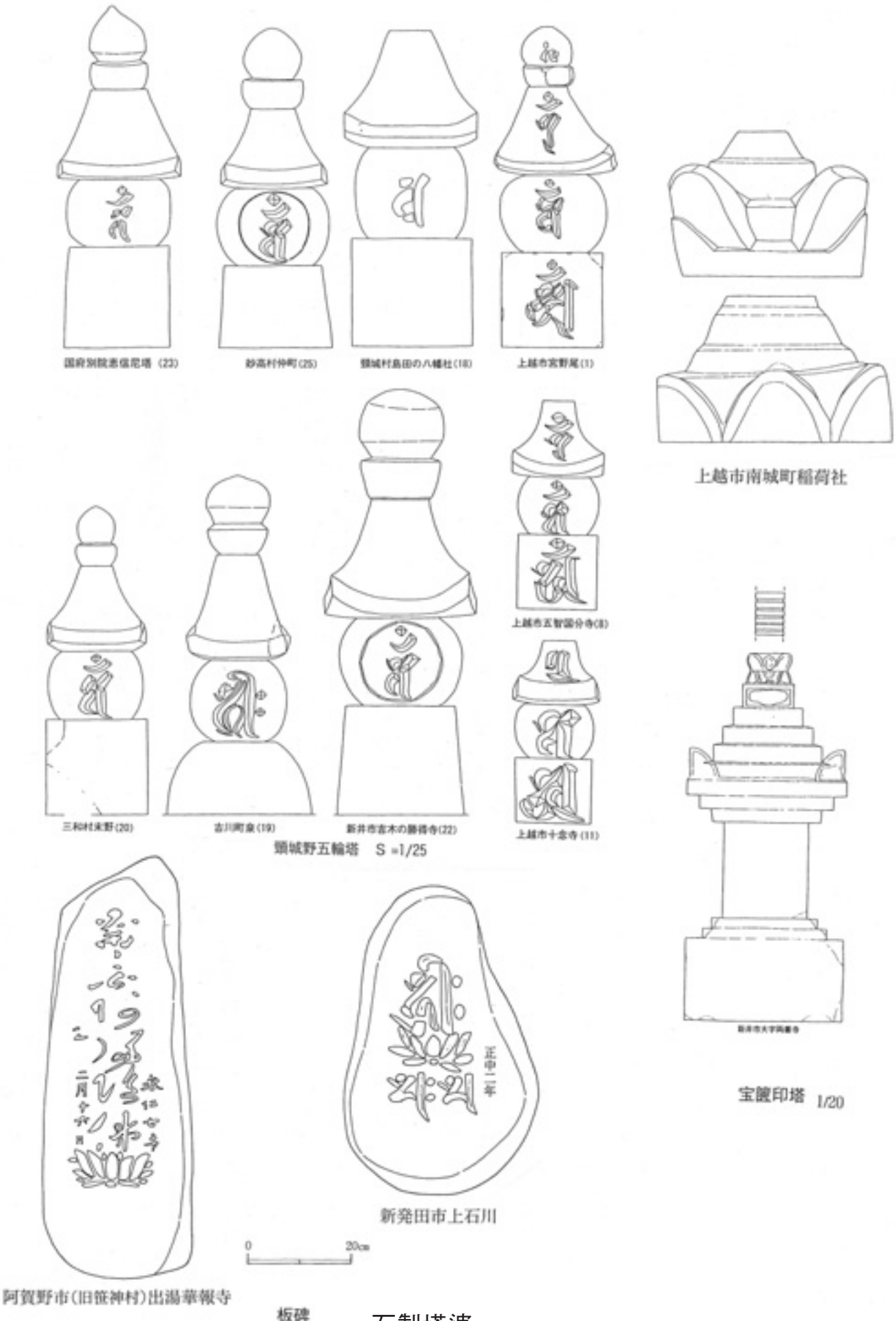
石塔は、特に古いものの内に中空の納骨信仰が認められるものがあり、その後14世紀後半になると骨壺が埋められた上に石塔が建てられるようになる。ただし、１基のみの場合は骨壺の直上に立てられる場合があるが、多数の場合は、必ずしも直上ではない場合が多いことから、骨壺の納入と石塔の造立にはタイムラグがあるものと考えられる。

３．木製塔婆と石製塔婆の関係

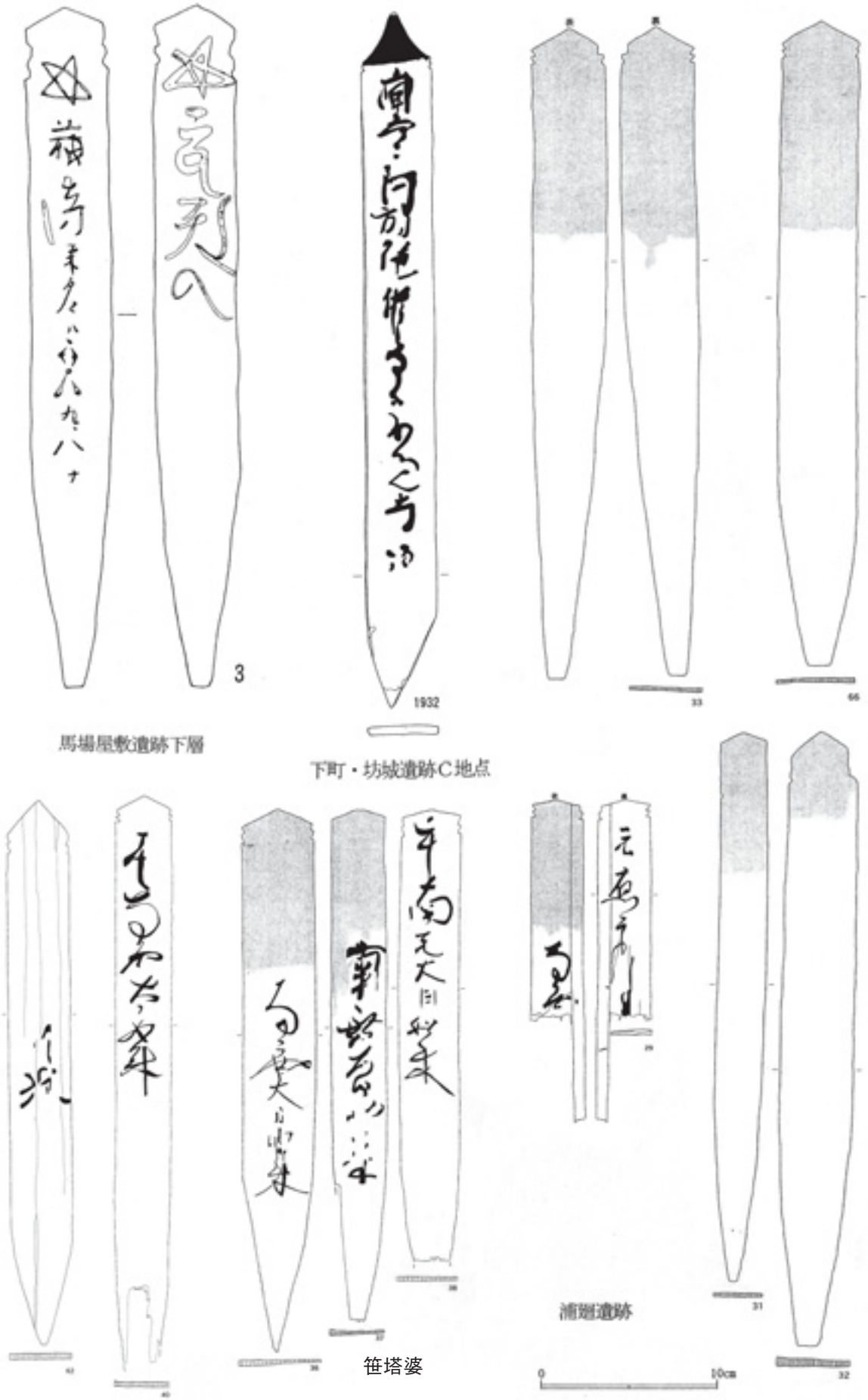
上でみてきたように、13世紀以降基本的には不朽の材である石製の塔婆が墓標としての位置を確立していく。木製品は、石塔が出来上がるまでの早い段階での供養や葬儀の場での一時的な役割を果たすようになる。それが笹塔婆の盛行につながり、現代にまで続いている。今回の研究集会は、能登の野々江本江寺遺跡での木製塔婆の出土を契機にしているが、今回の集成及び遺存条件の悪さを考えても12世紀以前の段階で塔婆を立てられた階層は、ごく一部にとどまるであろう。その裾野が広がるにつれて、多種の墓標が選択されることになり、それらは野外で長持ちする石塔が占めることになる。12世紀の段階で木製塔婆が選択された理由としては、やはり加工技術によるものと思われ、石塔造立集団が各地に定着するまでには、東大寺再建にかかわった宋人石工の将来から一世紀の時がかかったということとなろう。

参考文献

石川県埋文　2011『野々江本江寺遺跡』
白根市教育委員会　1983『馬場屋敷遺跡等発掘調査報告書』
中条町教委　2001『下町・坊城遺跡Ｖ　Ｃ地点』町埋文調査報告書第21集
新潟県教委　2003『浦廻遺跡』県埋文調査報告書第126集
北陸中世考古学研究会　2000『中世北陸の石塔・石仏』第13回研究会資料
北陸中世土器研究会　1994『中世北陸の寺院と墓地』第７回研究会資料
水澤幸一　2011『仏教考古学と地域史研究－中世人の信仰生活』高志書院
山川　均　2008『中世石造物の研究－石工・民衆・聖』日本史史料研究会選書２


国府別院恵信尼塔（23）
妙高村仲町(25)
頸城村島田の八幡社(18)
上越市宮野尾(1)
上越市南城町稲荷社
上越市五智国分寺(8)
三和村末野(20)
吉川町泉(19)
新井市吉木の勝得寺(22)
上越市十念寺(11)
頸城野五輪塔　S =1/25
新井市大字両巻寺
宝篋印塔　1/20
新発田市上石川
阿賀野市(旧笹神村)出湯華報寺
0
20cm
板碑

石製塔婆



笹塔婆

木製塔婆

東北地方の塔婆類と野々江本江寺遺跡出土塔婆

山口　博之（山形県立博物館）

東北地方日本海側（青森県・秋田県・山形県）を中心として、当該時期の塔婆資料を瞥見し、さらに野々江本江寺遺跡出土資料についていくつかを指摘したい。東北地方全体の面積は約66,886km^{2}であり、この地域は日本国の約18%を占めている。なお、北海道を含めてその面積を算出すれば約150,338km^{2}となり、国土の約40%にあたる。広大な地域ではあるが出土資料として野々江本江寺遺跡出土資料の類例は得られていない。

まず東北地方全体の様相について触れ、さらに文献資料にも範囲をひろげて野々江本江寺遺跡出土資料についていくつかを指摘したい。

Ⅰ　東北地方の木製塔婆（10～14世紀代）について

この時代の野々江本江寺遺跡出土例に類する木製塔婆については、東北地方ではほとんど事例を知ることはできない。

青森県の青森市の石江遺跡群では古代末にかかる相輪型の木製品が出土している。これは非常に特殊なものであり類例を探すことができない。後考を期したい。岩手県の平泉遺跡群のうちの志羅山遺跡では、笹塔婆が12世紀代の池跡から出土している。この笹塔婆について高橋実央が詳述している（(財）岩手県文化振興財団埋蔵文化財センター2000)。高橋によれば笹塔婆に記される文言から推定される宗教行為として「十斉日」や「現世利益的密教」の信仰などが伺えるという。笹塔婆の使用について出土資料から考察した論考は少なく貴重である。しかしながらいずれの笹塔婆も30cm内外の長さであり、珠洲市野々江本江寺遺跡のような長大なものではない。

この地域には吾妻鏡文治五年九月十七日条に福島県の白河関から青森県の外浜まで一町毎に金色の阿弥陀如来を描いた笠卒塔婆を配したという記録がある。また国宝の中尊寺経の「金光明王経金字宝塔曼荼羅」第三幀には朱彩の笠塔婆が描かれている。こうしたものは実在した可能性があるが少なくとも現在まで考古学資料として知見に上ってはいない。

秋田県北遺跡・州崎遺跡でも鎌倉期前後の墨書資料が出土しているが、これまた野々江本江寺の事例のような法量と形態は持たない。山形県大楯遺跡でも鎌倉時代の笹塔婆が出土しているが小型である。

注目されるのは山形県後田遺跡である。資料は遺跡の中央を南北に横断する川跡から出土したものである。出土状態は川岸ちかくにまとまっており、なんらかの儀礼によって廃棄されたことをうかがわせる。笹塔婆は全形を保っているものを参考とすれば、だいたいのものが30～40cm程度である。笹塔婆の先頭部を五輪塔型に切り込んだものもあるが、ほとんどのものは頭部が山形に作られ直下に二条の端刻みを持っている。記される文言はバンの種子を１字だけ配し、続けて南無大日如来と続くのが多い。一部普賢菩薩を記すものもある。組み合わせは大きく分けて笹塔婆＋呪符木簡となる。呪符木簡は古代には頻繁に出現するがこの時期以降はほとんどみることができなくなる。

後田遺跡の年代であるが確実な紀年銘に恵まれないのだが、笹塔婆の一部に「安仁年二月九日」と記されている資料がある。この文言をどう読むかについては議論の分かれるところであり明確な結論は出されていない。私案ではあるが「安仁年二月九日」は、「安貞二年二月九日」を略したものと見ておきたい。この資料自体笹塔婆としては大型であり、鎌倉時代までさかのぼる古い様相を持っていること。また日本の年号で安を配するものは鎌倉時代では安貞のみであること。二月九日はおそらく時正であり彼岸をあらわし、時正は鎌倉時代から板碑など石造物に記されることが多くなること。さらに紀年には慶長五年を慶五と年号２文字目を略す場合などがあること。などによる。こうした推定

により木簡の紀年を安貞二年と見れば1228年ということになる。これ以前の安元二年（1176）も考察の対象ではあったが、12世紀代の遺物はまったく見ることができなかったため除外している。

以上のようなことをまとめれば、古代的な木簡の様相はおそらく11世紀ごろに大きく変わり、12世紀になるとより後の時代に連なるような笹塔婆などの出現を見る。また、呪符木簡もこの時期を境として徐々に消滅していくとみることができよう。

しかしながら、野々江本江寺遺跡のような巨大な木製塔婆はこの地域ではみることはできないのである。つぎに石造物の様相について触れてみよう。

Ⅱ　石塔の出現と展開の諸相について

この地域の石塔の出現は12世紀代にさかのぼる。紀年のあるものとないものがあるが、紀年のあるものは、天養元年（1144年）山形県山形市立石寺「如法経所碑」などが上げられる。この石造物は凝灰岩製品であり全体として駒型に整形した石材の碑表に長文の文言を刻むものである。如法経を納める趣旨をその内容とし、経塚の造営記念碑としての意味があろう。なお、こうした如法経碑は全国でこの時期（11～13世紀中心）に営まれ、立石寺の事例はその北端をなしている。

またこの時期12世紀にさかんに石塔が造営されるのは、奥州藤原氏の根拠である岩手県平泉である。ここには、五輪塔（中尊寺釈尊院五輪塔が我国における在銘最古の五輪塔で、反花座の側面に平安時代後期仁安四年（1169）の紀年銘がある。）、平泉型宝塔（平泉に特徴的な宝塔であり、分布の中心が平泉を中心とした奥州藤原氏の勢力範囲と重なる。）や伝教大師坐像、阿弥陀如来などの大型石仏、さらには磨崖仏がある。しかしながら平泉以外の地域ではこうした石造物の造営は例外的である。

13世紀代の半ば以降になると板碑を中心とした石造物が営まれるようになる。これは野々江本江寺の木製塔婆の存在と関係して興味深いものがある。板碑は、青森県大光寺遺跡出土木製品を例として考えれば、素材を超えて相互に型式を交換する場合があると考えられはしまいか。青森県大光寺遺跡出土木製品は、報告書によれば長さ約157cm、幅約35cm、最大厚約9.5cm、最低厚約２cm である。頭部と思われる部分は逆台形状の突起があり、その下が半月状に盛り上がり、２条の刻線が施される。その盛り上がりから下は平坦に削られている。その下は腐朽しているもののやや厚みをもたせており、この部分を地面に差し込み板碑状に起立するのであろうという。種子などの痕跡はない。このような板碑状木製品の類例は、北海道上ノ国町の勝山館でも見受けることができる。

実はこうした形と類する石造物が山形県天童市を中心とする地域にあり、成生荘型板碑（通常山形となる先端部が三角形に屹立せずお椀状に盛り上がる型式の板碑）と呼ばれている。成生荘型板碑や大光寺遺跡出土木製品のような頭部形態の遠隔の地域での類似は、共通の祖形といったものがあることにより生じるのではなかろうか。

石造物の板碑と大光寺出土木製品などはきわめて類似することは、共通する概念を表現する際に素材が異なるだけであったとみることができるのかもしれない。つまり木製品と石造物は型式を相互に交換しうる存在であったと見ることができるのかもしれない。山形県天童市周辺の成生荘型と青森県の大光寺遺跡出土木製品や山梨県の板碑などとの類似性はこうした理由によるものと考えておきたい。さらに野々江本江寺遺跡出土の笠塔婆と板碑の類似性もこうした理由によるものかもしれない。

Ⅲ　野々江本江寺遺跡の木製塔婆について

野々江本江寺遺跡の木製板碑、木製笠塔婆に類する資料は少なくとも東北地方では知ることができない。このため東北の事例から論及できる点は少ないのだが、資料検討会で実見した内容を含めいくつか指摘しておきたい。

野々江本江寺遺跡木製笠塔婆額の実見により、種子を刻む部分の一部に朱彩の遺存がある可能性を

指摘したい。実は朱彩の笠塔婆には類例が存在するのである。まず東北地方の岩手県平泉町にある国宝中尊寺経の「金光明王経金字宝塔曼荼羅図」第三幀に描かれる朱彩の笠塔婆像と共通する。この曼荼羅図は『金光明王経』経典の文字を以って宝塔一宇を表したものであり、宝塔の左右に経典の趣意を絵像で表している。ここに朱彩の笠塔婆とこれを斧で切り倒そうとする人物が描かれている。12世紀に遡る事例となる。さらに吾妻鏡文治五年五月八日条には「･･･塔婆。被塗朱丹也。･･･」と記されており、塔婆は朱色に塗る場合のあることがわかる。同じように『餓鬼草紙』の塔婆は「河本家本」（東京国立博物館蔵）にある有名な石積み塚の上にある弥陀三尊を描いた笠塔婆には朱彩があり、おなじく「曹源寺本」（京都国立博物館蔵）の塔婆にも朱彩がある。餓鬼草紙の成立年代は12世紀代である。12世紀から13世紀の塔婆は朱彩されることがあるということを指摘しておきたい。

さてもう一点であるが、東北地方の事例からは水辺に関係して笹塔婆などが出土する場合のあることを報告した。さて、野々江本江寺遺跡の木製塔婆が出土した位置であるが、金川の河辺に位置している。想像をたくましくすれば金川河畔に木製塔婆が立ち並ぶ風景を思い浮かべることができる。実は木製塔婆は河畔に立ち並ぶことがあったのである。奥書に正安元年（1299）の紀年を持つ『一遍上人絵伝』には、木製塔婆がさまざまな場所に描かれており、当時木製塔婆がいかなる場所に営まれていたのかを示している。この中の『上野の踊屋』の場面には一遍によって造られた簡素な踊り屋が描かれているが、その周辺の風景として、川とそこに架け渡される板橋、さらに街道が描かれ、街道が川を渡河したあたりには木製塔婆が林立しているのである。こうしたあり方はおそらく水辺の祭祀として笹塔婆などが使用されたことと関連している可能性があるのかもしれない。中世には河畔に木製塔婆が営まれる場合のあったことを指摘しておきたい。

最後にではあるが、野々江本江寺の塔婆が３本出土していることからすれば三尊形式になるのではないかということや、額に記された種子は何かなどということについては引き続き興味をもっていきたいと思っている。

参考文献

① 男鹿市教育委員会2005「脇本城跡」男鹿市文化財調査報告書第29集
② 宮城県教育委員会2006「中野高柳遺跡Ⅳ」宮城県文化財調査報告書204集
③ 佐川美術館2004「国宝中尊寺展」
④ 岩手県埋蔵文化財センター他1995「発掘された北の都」
⑤ 元興寺仏教民俗資料研究所1976「明王院の碑伝」
⑥ 秋田県教育委員会2001「北遺跡」秋田県文化財調査報告書第315集
⑦ （財）岩手県文化振興財団埋蔵文化財センター2000「志羅山遺跡第46・66・74発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財発掘調査報告書第312集
⑧ 浪岡町2004「浪岡町史第二巻」
⑨ 大石直正・川崎利夫2001「中世奥羽と板碑の世界」
⑩ 秋田県教育委員会2000「州崎遺跡」秋田県文化財調査報告書第303集
⑪ 山形県埋蔵文化財センター1997「後田遺跡・大道下遺跡第２次発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書第49集

討論と展望

魚水　環（財団法人石川県埋蔵文化財センター）

研究集会のまとめにかえて、出席者および発表者による意見交換を行った。意見交換に先立っては、木製塔婆の環日本海域各地における出土・確認事例について、改めて事例や年代の確認がなされた。

野々江本江寺遺跡出土の木製板碑・木製笠塔婆を除けば、木製の板碑と笠塔婆が同時に出土した例は知られておらず、その定性的な説明は難しい。

意見交換の様子

板碑に類似する遺物が出土した例としては、山陰地方で、鳥取県米子市の吉谷亀尾前遺跡から出土した木製品が挙げられる。大きさ・形状とも板碑に類似しており、また、出土状況から、原位置での出土ではなく廃棄、または転用されたものであろうと思われる点も野々江本江寺遺跡の例と一致する。さらに報告では、８～10世紀とされる年代にも、上述の状況から検討の余地があるとしている。

加えて、同じ島根県出雲市の山持遺跡Ⅲ－２区から出土した木製品は、板碑の数少ない類例のひとつと言える。上記２点に比べると形状は大型であるが、ある程度まとまって出土しており、原位置を保っている可能性も考えられる。年代としては少々下るようで、13世紀末～14世紀の年代が測定によって与えられている。なお、同遺跡からは角柱状の木製塔婆も出土しており、共伴する白磁から11世紀後半～12世紀前半の年代が与えられている。

笹塔婆や板塔婆等、ほかの木製塔婆類については、各地域で出土するものの時間差があり、出土例もそう多くはない。しかし全体としては、12世紀後半から後がひとつの目安となって全国的に広がりを見せるような傾向が見られる。

木製塔婆が石製塔婆へと移り変わっていくとすれば、その過程で木製塔婆や笹塔婆や板塔婆、あるいは宝幢など、多くのバリエーションが見られることはどのように位置づけられるか、といった問題提起もなされた。これに対して、山陰からは、木製板碑に同定されうるものは出土していても、石製板碑は山陰で確認されていないこと、また九州からは、木製卒塔婆よりもむしろ石製塔婆が先行して存在するかのような様相すら見えること、そして、そもそも木製塔婆は出土例自体が乏しく、その用途・機能を明らかにすることは難しいことなどから、木製塔婆が石製塔婆に移り変わっていくとは一概には言い切れないとする慎重な意見が見られた。しかしその上で、これらの事実に対して、木製塔婆が直接的に石製塔婆に置き換わるというよりは、塔婆類の中で受容されるものとされないものがあった、あるいは、当時の利用者の間で塔婆に対する理解の程度に差があったと解釈しうるのではないか、との意見も得られた。

意見交換の様子

また、石製塔婆等も含めた「墓標」全般に関することとして、墳墓上に墓標を建てることについて、『一遍上人絵伝』等を引き、墓の表象物とし

て木製の墓標を建てる可能性の指摘があった。これは五輪塔などがマウンド上に建つことはままある、との指摘にとどまっている。

墓標については更に、石製塔婆と葬制と墳墓形態のそれぞれの変化について、その同時性が検討された。木製塔婆の広がりと同様、各地域によって時間差はあるものの、12世紀後半ごろから14世紀にかけて、主に社会的階層の高いものを端緒として徐々に浸透していく様子が各地域で見られた。

意見交換の様子

当然、このような変革がなぜその時代に起こるかが疑問としてあげられるが、これに対する考古学からの返答は難しい。その中で、石製塔婆などの地上表象物は、これを作り得た権力と、その継承者を永続的に後代に示すためのシンボルという機能があったのでは、という意見が見られた。平安期は社会的地位に関して、古代から国家制度による保証が残存していたのに対し、鎌倉初期ごろ、ないし室町期からは自分の力(権力・能力・その正統性等)については自分で主張せねばならず、また主張することで周囲から認められるという社会に移っていったことが背景にあるのではないか、ということである。

討論の最後には、まとめとして、吉岡康暢先生から今後の展望が以下のように示された。

中世人にとって信仰・宗教は欠かせないキーワードであった。木製品の残存状況が限られている中、公界論的なものを含めた世界観に対し考古学がどこまで踏み込んでいけるか。その点においても野々江本江寺遺跡の事例は12世紀の空白を埋める、大きな発展となりうる発見である。しかし、まずは場の産物であるか、また墓標塔であるのか、といった前提となる議論を明確にする必要はあろう。

翌29日は、県内各地から出土した木製塔婆関連遺物の資料見学会が行われた。七尾市小島西遺跡・金沢市豊穂遺跡の板状木製卒塔婆、七尾市三室オンド遺跡の木製風招、中能登町水白モンショ遺跡・宝達志水町南吉田葛山遺跡の笹塔婆、小松市浄水寺跡の木製宝珠と笠、金沢市梅田Ｂ遺跡・小松市千代・能美遺跡の笠塔婆の笠と思われる木製品などが他に展示された。珠洲市野々江本江寺遺跡出土の木製笠塔婆の額に描かれた梵字の解釈については異なる見解も出され、笠塔婆と板碑の設置状況の復元の試みなども含め、活発に議論が交わされた。

なお、付記した表は、今回報告された資料を整理したもので、討論における基礎資料として用いたものである。諸氏の理解の一助となれば幸いである。

資料見学会の様子

付表：環日本海文化交流史調査研究集会「中世日本海域の墓標－その出現と展開－」　検討資料

地域	木製塔婆（古代～中世前半）			石製塔婆				火葬		墳墓（古代末～中世前半）
				出現期			展開期			
	遺跡名	種別	時期	遺跡名	種別	時期		出現期	普及期	
石川	珠洲市野々江本江寺遺跡	笠塔婆	12C 頃	羽咋市福水朝日山遺跡	板碑	弘安二（1279）年	14C 後半～	13C 前半	14C 後半～	12～13C に木棺墓や墳丘墓が造営され、14C から五輪塔を伴う配石墓
		笠塔婆		加賀市薬王院五輪塔	五輪塔	14C 代				
		板碑		能登町最安寺中世墓	五輪塔	14C 代				
	小松市浄水寺跡	宝珠	11～12C	穴水町明泉寺石造五重塔	層塔	14C 前半				
	七尾市小島西遺跡	卒塔婆	11C 末～12C	輪島市白山神社石造五重塔	層塔	14C 代				
	金沢市堅田 B 遺跡	笹塔婆	13世紀中葉	珠洲市八幡神社	層塔	永和二（1376）年				
九州	佐賀市大西屋敷遺跡	卒塔婆	12C 後半	直方市観音堂梵字阿弥陀三尊碑		延久二（1070）年	13C 後半～	12C 後半	13C 後半（高階層のみ）	屋敷墓は平安後期～、共同墓地・墳墓堂は鎌倉期～
	神埼市城原三本谷南遺跡	卒塔婆	12C 後半	臼杵市中尾堂ヶ迫五輪塔	五輪塔	嘉応二（1170）年				
	太宰府市大宰府史跡（観世音寺）	卒塔婆	嘉禄三（1227）年		五輪塔	承安二（1172）年				
		卒塔婆	嘉元二（1304）年	熊本市本光寺笠塔婆	笠塔婆	安元元（1175）年				
山陰	米子市吉谷亀尾前遺跡	卒塔婆		倉吉市広瀬ヒイデ山五輪塔	一石五輪塔	12C 中頃	14C 中葉～	島根県14C～、鳥取県12C 前葉～中葉	島根県15C～、鳥取県14C～	福本家ノ上古墓（13C 後半～14C）や日下古墓（同）など、石組・石積基壇上から五輪塔出土
	松江市原の前遺跡	卒塔婆	平安時代後期	（倉吉市）大日寺五輪塔	五輪塔	文永二（1265）年				
	出雲市山持遺跡	卒塔婆	11C 後半～12C 前半	倉吉市大日寺円地坊19号塔	五輪塔	平安末～鎌倉初				
		卒塔婆	13C 末～14C	琴浦町石賀弘文氏五輪塔	五輪塔	鎌倉初期				
福井	未確認			福井市深谷町	五輪塔	文永二（1265）年	14C～	古代末～中世初	13C 末～	13C 後半～
				坂井市上金屋八幡神社塔	層塔	文永三（1266）年				
				坂井市井向白山神社板碑	板碑	文永十一（1274）年				
				鯖江市中野勢至堂五輪塔	五輪塔	鎌倉前期				
富山	南砺市梅原胡摩堂遺跡	卒塔婆	13C	上市町黒川上山2号墓	五輪塔	13C 前半	14C 後半～	12C 後半	15C	黒川上山墓跡墳丘墓（13C 前半）から五輪塔出土
	南砺市蛇喰 A 遺跡	塔婆	13C 後半～14C か	射水市本江神明社	板碑	文永四（1267）年				
				黒部市荻生	五輪塔	嘉暦四（1329）年				
越後	新潟市馬場屋敷遺跡下層	笹塔婆	13C 末	阿賀野市出湯華報寺	板碑	永仁七（1299）年	14C 中葉～	13C～	14C 中葉～	12C 後半から屋敷墓や墳丘墓が造営され始め、14C 中葉以降骨壷の上に墓標としての石塔が造立
	新潟市浦廻遺跡	笹塔婆	元応二（1320）年	頸城郡一帯	五輪塔	13C 末～				
	胎内市下町・坊城遺跡 C 地点	笹塔婆	13C 前半							
東北	平泉町平泉遺跡群	笹塔婆	12C 後半	山形市立石寺如法経碑	石塔	天養元（1144）年	14C 代	12C 末～13C	13C 後半～	山形：12C 代の積石塚では火葬だが石塔は伴わない。13C 後半～14C に板碑を伴う中世墓を確認
	鶴岡市後田遺跡	笹塔婆	12C 末～14C	平泉町中尊寺釈尊院五輪塔	五輪塔	仁安四（1169）年				

（種別の名称・時期は報告に準じる）